（無言）

鈴木　では、じゃあ、早速、お聞きしたいと思います。

大藪　お願いします。

鈴木　えっと、大藪さんの、えっと、生年月日って、まず、教えてもらえますか。

大藪　はい。えっと、西暦で 1994 年の 5 月 25 日です。

鈴木　現在、お年は何歳ですか。

大藪　今、27 歳です。

鈴木　障害の診断名って、大藪さん、なんでしたっけ。

大藪　は、えっと、脊髄性筋萎縮症、SMA です、の II 型になります。

鈴木　II 型。はい。えっと、鳴滝総合支援学校に大藪さん、あの、通学されてましたよね？

大藪　はい。してました。

鈴木　いつでしたっけ、それって。

大藪　鳴滝は、えっと、小学校の 5 年生から高校 3 年生まで通ってました。

鈴木　野瀬さんとクラスが一緒だったのはいつでしたっけ？

大藪　はですね。野瀬君とは小学校の、えっと、5、6 年生のときは同じクラスで。で、中学に上がってから、あの、ばらばらに、クラスはばらばらになったんですけど、ま、でも、あのー、鳴滝自体が結構、こじんまりした学校だったので、割と休み時間とかは顔合わすみたいな、そんな感じでした。

鈴木　あ、ありがとうございます。2 歳年上っていう感じですよね？

大藪　あ、そうですそうです。

鈴木　ですよね。あの、鳴滝って普通学校に比較して、どんな感じだったんですか。

大藪　鳴滝は。あ、普通学校っていったら、一般の？

鈴木　一般の。小４年まで、あ、小５の途中まで、じゃあ。

大藪　あ、実は、それまでは、また別の支援学校に行ってて。

鈴木　あ、そうだったんですか。

大藪　そうなんです。支援学校から支援学校へ転校したっていう感じだったんですよ。

鈴木　なるほど。じゃあ、普通学校は、じゃあ、基本的には考えなかったってことですか。

大藪　あの、ま、本当はうちの両親は小学校に上がる前に、ま、普通学校、地元の学校に行かせたいと思ってたらしくて。で、ま、地元の小学校に一回、相談に行ったときに、あの、えっと、ま、両親のうち、どちらかが付き添ってくれるんだったら、あの、入学許可しますよみたいなことを言われて。ただ、ま、うち、ちょっと、うちの親はどちらとも、その、仕事の関係で付き添うことができなくて。で、ま、一回、うちの父が教育委員会のほうに言いに行こうと思ったらしいんですけど、だけど、なんか、ちょっと、ま、いろいろあって、結局うまくいかなくてっていうことで、もう、支援学校へ進んだっていう、そんな感じだったみたいです。

鈴木　両親のうちの、どちらかが付き添えば、入学が許可されてた？

大藪　ということだったらしいです。

鈴木　それ、やっぱり、医療的なことですか。

大藪　えっと、いや。医療というよりは、ま、介助の面ですね。その、トイレとか、あと、多分、授業のときのそういう、あの、なんでしょう。教科書とか筆箱とかセットとか、その辺のことが、やっぱり、学校の先生では対応できないというところだったみたいですね。

鈴木　あのー、で、それ、小学校５年から鳴滝に行って。学校自体はあれですか。よかったというか、どんな感じでした？

大藪　あ、そう、学校自体は。そうですね。あのー、まあ、僕、個人的には、ま、あの、よかったといえば、よかったと思います。なんか、その、ま、鳴滝に転校した理由っていうのが、その、その前に行ってた学校が、割と、まあ、知的とかの子たちが多い学校だったので、授業が、まあ、そういう、何ていうんでしょうね、教科書とか使う感じではなくて、まあまあ、あの、楽しみながら学ぶみたいな感じのスタイルの学校で。それで、ま、僕の場合、ちょっと、もうちょっと勉強したほうがいいんじゃないかという、ま、先生の勧めもあって。で、鳴滝に転校して。で、そうですね。まあまあ、あのー、筋ジスに特化したというか、(＊＊＊＊ケンゼン@00:04:57)の人たちが多い学校だったから、そういう意味では、僕自身はそんな不満はなかったとかだったんですかね。

鈴木　あのー、通学されてるときにJCILのことってご存じだったんですか、高校3年までの間って。

大藪　全く知りませんでした。

鈴木　じゃあ、アテンダントサービスを使ったっていう経験もないっていうことなんですね？

大藪　なかったですね。

鈴木　あの、野瀬さんおっしゃってたんですけど、2011年かな。あのー、えっと、病棟移転されたときがあって、宇多野。そのとき、あのー、野瀬さんの、通学ができないことになった、高校1年のとき。そのときって大藪さん、いらっしゃいましたか。

大藪　いや。僕、そのときには、もう卒業して。

鈴木　あ、卒業されてましたか。

大藪　あ、そうですね。違うか。1年かぶってるか。あ、いや。多分、僕はいなかったと思いますね。

鈴木　いらっしゃらなかった？

大藪　そうですね。

鈴木　あ、じゃ、それ、分かりました。で、あのー、ボランティアサークルって、大藪さん、いつの年に、どこでつくられたんですか。

大藪　あれはですね、あのー、高校１年生のときに、まあ、担任の先生の、何ていうか、ま、勧めというよりは、授業の一環という形に、あのー、やり始めたのが最初、きっかけだったんですけど。まあ、えっと、あれですよ。僕、当時、僕含めて高等部に３人、高等部が３人、学生がいてて。で、みんな、最初のときは大学に進学したいというふうに、みんな言ってて。で、そうなると、あの、大学に行ったら、その、授業のノートテイクとかのボランティアさんを集めなきゃいけないっていうふうなことを言われて。で、まあ、じゃあ、学校に、高等部の間にそういう練習も兼ねて、ちょっと、募集とかやってみようかっていうのが最初のきっかけだったんですけど。そうですね。なんで、高校１年生から始まりました。

鈴木　これ、名前はありますか、ボランティアサークル。

大藪　えっと、ボランティアサークルあさがおっていうんですけど。

鈴木　漢字ですか。

大藪　いえ。平仮名。

鈴木　平仮名。どうして、あさがおにしたんですか。

大藪　これはですね。あの、当時、クラスメイト、僕も含めなんですけど、そのみんなの頭文字を取って、あさがおになったっていう感じ。はい。特に深い意味はないです。

鈴木　おっていうのが大藪さん？

大藪　あ、そうそう。フフ。そうです。

鈴木　この担任の先生ってナガイ先生ですか。

大藪　あ、いや、ではなくて、また別の。あ、これ、お名前言ってもいいですか。多分、今は、あの、全然。ナガイ先生じゃなくて、ま、オオニシ、オオニシ先生っていう。

鈴木　オオニシ先生。

大藪　はい。

鈴木　今でもお付き合いとかあるんですか。

大藪　今は、まあ、年賀状のやりとりはしてますね。あと、まだLINEも知ってるので。大学は遠のいてって感じになるんですけど。あんまり関わりはない。

鈴木　ああ。でも、なんか、授業の一環としてそういうことをやってみたらっていうこと。いや、やってみるってこと自体、大藪さんが提案されたんですかね？

大藪　いや。それは、まあ、どちらかというと、先生発信。先生のほうから、あのー、やってみる。何ていうかな。ま、やってみないかっていうような感じの提案を、僕たちが受けたという感じですかね。

鈴木　へえ。で、それを聞いて、あ、確かに、大学に行くんだったらそういうの必要かなって思ったってことですか。

大藪　そうですねそうですね。で、まあ、当時は、あの、介護等体験っていって、あの、教育実習受ける学生さんたちが、鳴滝にも年に3回か4回ぐらい来てはったと思うんですけど。で、そういうときに学生さんたちつかまえて、あの、こういうことやってるから協力してもらえませんかみたいなことをやってましたんですけど。

鈴木　で、ボランティアサークルは当時、何名から始まったんですか。

大藪　あ、ボランティアさんたちですかね？

鈴木　生徒さん3名と。

大藪　と、ほんで。まあ、そうです。生徒3名で始めて。で、えー、一番最初の頃はボランティアさんも本当に、まあ、1人とか2人とか、そんな感じでしたね。ただ、ちょっと、この辺、少しややこしくなるんですけど、実はサークルは、どちらかというと、僕たちがまあ、休日、休みの日にどっか出掛けたいとか、あと、ま、病棟にみんないるときって、あのー、ヘルパーさん使えないから、それで、ボランティアさんに、ちょっと病棟内で少し介助とかやってほしいっていうのが最初だったんですけど。ま、それはあさがおの話で。

　あの、学生ボランティア。まあ、僕たち、学ボラっていわれてたんですけど、それは、あのー、鳴滝の学校に来てもらって、学校の中で、まあ、授業のときのノートテイクのサポー

トしてもらうようなっていう講習もしてて。なので、何ていうんですかね。二つやってたというか。

鈴木　学ボラと。あともう一つはなんか呼び名あったんですか、学ボラじゃないほうの。

大藪　は。あ、学ボラが、えっと、1 個はあさがお。あさがおが、その休みの日とかの。

鈴木　あ、なるほど。

大藪　なんです。で、今でも、あさがおは一応、残ってる。残ってるっていうか。

鈴木　へえ。残っているというのは、その、鳴滝の支援学校の中で残っているっていうことですか。

大藪　あ、ではなくて、僕含め、あの、友達と一緒に。ま、今でも、あのー、何ていうんでしょう、サークル自体はまだ続いている感じで。もう学校は関係なくなってるんですけど。僕と、あとは、まあ、そのとき一緒に、クラスメイト 2 人と、あと、後から野瀬君も入って、で、4 人で今はやっているっていう感じなんですけど、実際のところはあんまり機能できてないという感じではあるんですけど。

鈴木　学ボラのほうも続いてるんですか。

大藪　そっちは。あ、続いてるかな。多分、学校がそれは割と主体でというか、やってたりする。僕が卒業した後は少なくともまだやってますので、続いてました。

鈴木　ということは学ボラというのは鳴滝の支援学校の中で行われてて、あさがおっていうのは、なんか、外で続いてるような感じのイメージですか。

大藪　そうです。はい。そういうイメージです。

鈴木　で、えっと、ボランティアさんってどういうふうに集めたりとかされてますか。

大藪　は、ま、ほとんどが、その、えっと、介護等体験で来られた学生さんに、あの、ま、僕たちが PR して、で、もう、その場で、ちょっとメールアドレスを教えてほしいって言って。で、面談に、後からメール送ったりしてって。そういう方法と、あとは、あの、ホームページとか載せて。で、そこで、あのー、それを見て、来てくれる方も。何人ぐらいいたか

な。3 人か 4 人ぐらいはいはったかなという感じで。あと、ま、京都の、えっと、ボランティアセンターっていって。あのー、どこだったかな。丸太町のハートピアの中。そこにも登録をして、ま、そこ経由で、あのー、連絡が来たこともあります。そんな感じでやってます。

鈴木　ホームページを作るって結構、難しいと思うんですけど、どなたがやったんですか。

大藪　ホームページは、ええっと、野瀬君。あ、野瀬君も作ってくれたけど、その前に、もう一人と一緒にやってるっていう。ま、名前、多分、言ってもいいと思うんですけど、上田君っていう子がいてて。その子が、あの、ウィックスで。無料でホームページ作ろうというサイトがあるんですけど、それを使って、作ってくれましたね。

鈴木　で、結局、毎年っていうか、その、メンバー、一番多いときでボランティアさんって何人？

大藪　多いときで、ええっと、まあ、10 人前後ぐらいですかね、多いときで。

鈴木　ということは、高校 1 年というと、2010 年ぐらいですか。16 歳？

大藪　えっと、そうですね。16 歳。2010 年ぐらい。そうですね。ぐらいのときにやり始めて。で、まあ、なので、結構、活発だったときは、そうですね。結構、月に、ま、毎月 1 回ぐらいはどこかに出掛けて、ボランティアさんも一緒にやってもらってっていうことをやってましたね。

鈴木　で、えっと、野瀬さんが高校卒業されるとき、えっと、あれは 2015 年だったと思うんですけど、あのー、そのときから野瀬さん、そのボランティアサークル入るようになったんですね？

大藪　そうですそうです。

鈴木　で、えっと、なんか、自立生活している、えっと、宇多野の先輩を訪問したっていう。あ、宇多野の、えっと、元、入院してて、退院した人の、を、みんなで、なんか、訪問したっていう話をされたの覚えてらっしゃいます？

大藪　ちょっと待ってくださいね。誰のことだろう。えっと。あ。え。一緒にサークルやってるメンバーではない？

鈴木　ないんじゃないですかね。なんか、みんなで。あのー、なんか、ミシガンって乗りましたね？琵琶湖。

大藪　乗りました。ミシガン乗りました。

鈴木　なんか、あれ、それ、一緒に乗ったのかな？

大藪　あ。ああ。多分、じゃあ、分かった。はいはい。分かりました。分かりました。

鈴木　分かりました？

大藪　分かりました。

鈴木　その人って、ま、年に2回とか3回とか訪問されたんですか、みんなで。

大藪　あ、その先輩の所は。そうですね。あの、ごめんなさい。さっき名前言っちゃったけど、それが上田君っていう子なんですけど。

鈴木　あ、メンバーの方なんですね。

大藪　メンバーの子だと思いますね。ですね。ですね。

鈴木　あ、すみません。あの、メンバー、あの、3人いらっしゃってて。大藪さんと、上田さんがいてて。上田さんっていう方は元、宇多野の入院されてる人？

大藪　あ、そうです。もともと入院されてて。

鈴木　ああ、そういう人。あ、そっか、そっか。鳴滝ですよね。

大藪　で、高校卒業して、退院しはったっていう感じだったんですけど。

鈴木　ああ。じゃあ、その人ですね。

大藪　多分、その人のことだと思います。

鈴木　もう一人の人は？

大藪　もう一人は今でも宇多野病院に入院してる子なんですけど。

鈴木　へえ。

大藪　そうなんですよ。1 人いてて。

鈴木　いらっしゃるんですか、そういう方が。

大藪　そうなんですよ。彼とも、ま、今でもつながってて。で、それこそ、あの、宇多野病院が、あの、コロナで面談制限かかるまではちょこちょこ、僕、会いに行ったんですけど。ただ、彼自身。そうなんですよ。ちょっと、何ていうかな。少し、自分の、ま、病状があんまりよくないということもあって。うん。そういう退院とか自立の話はするけど、あんまり、うん、前向きにはなれないっていう感じですね、今のところ。

鈴木　その方は外出、一緒にされてたんですか、ボランティアサークル。

大藪　やってました。

鈴木　やってましたっていうことはいつぐらいまでやってらっしゃった？

大藪　あのですね。一番最後に一緒に出掛けたのが。いつだったかな。もう、でも、僕が大学生で。そうですね。野瀬君がまだ宇多野病院にいるときで。多分、3 年、3、4 年前、4 年。もうちょっと前かもしれませんね。

鈴木　あの、2016 年に、あのー、虐待事件あるじゃないですか。

大藪　ありました。ありました。

鈴木　あれ以降、なんか、移譲の制限とか、移動の制限とかあったんですけど、それ以降、その人って外出できてましたか。

大藪　彼は。いや。多分、それ以降、できてないと思いますね。

鈴木　ああ。じゃあ、やっぱり、野瀬さんと同じように、同じぐらいの時期にそのボランティアサークルで外出できなくなったっていう感じですか。

大藪　そうだと思います。そのぐらいだと思います。

鈴木　その方、ちなみに気管切開されてますか。

大藪　あの、しましたね。もともとしてなくて。あの、えっと、かぽって、こう、鼻につける鼻マスク。

鈴木　鼻マスクですか。

大藪　だったんですけど、ちょっと、でも、それで、ただ、気管切開の手術を。そうなんです、そうなんです。ちょっと前。何年前だったかな。多分、2、3 年前ぐらいにやってたと思うんですけど。

鈴木　ああ。その虐待事件の後ですかね？

大藪　後だったと思います、確か。

鈴木　ああ。じゃあ、気管切開をしてなくても、そういう外出ができなくなったような感じなんですかね？

大藪　そうでした。そうでした。そんな感じでした。

鈴木　じゃあ、大藪さん、その方にお会いしたのはもう。最後に会ったのが 2017 とか？

大藪　ええっと、あ、でも、宇多野病院って、あのー、野瀬君を訪問しに行って。

鈴木　あ、訪問しましたね、2017 年。

大藪　そのときに一緒に、その子にも、ちょこっと会いに行ってたりとかしてたので。そうですね。2018、2018 年ぐらいだったんですけど、合ってますかね。

鈴木　はいはいはい。あのー、野瀬さん、気管切開してるじゃないですか。で、2015 年にボランティアサークルで一緒に、こう、外出するようになってるじゃないですか。で、それ、一応、あのー、あの、宇多野の主治医さんも、それ、認めてらしてて。でも、実態としては、あのー、三号研修受けてないですよね？

大藪　あ、受けてないです。

鈴木　それについて、大藪さんとしては、なんか不安とかありました？

大藪　ああ。当時は、僕は全然、あんま、そういう知識がほぼほぼなくて。もう、ただただ友達と一緒に外出したいっていう、それだけだったので。で、あのー、なんか、でも、実際、まあ、野瀬君。なんか、その、それこそ、さっき言ってた、あのー、なんでしたっけ。あ、ま、さっき言った、そのしばらく外出できてないっていう宇多野病院でいる子も、それこそ、最初の頃はヘルパーさんじゃなくて、ボランティアさんが呼吸器の電源オン、オフとか、全然そういうのやってたんですけど。でも、ちょっと、あるとき、病院から、やっぱりそれはやめてほしいみたいなことを。せめて、家族の誰かが一緒に付いて行くならいいけどっていうふうなことを言われて。そっから彼もちょっと出にくくなったっていうのはあったんですよね。

鈴木　それ、それって虐待事件の後？

大藪　あれは虐待事件よりも前だったと思いますね。うん。まだ僕たちが高校生ぐらいのときの話だと思います。なので、2013 年とかぐらいですね。

鈴木　そんな前ですか。でも、なんか、不思議なのは。えっと、ごめんなさい。その方は家族が、その、呼吸器のスイッチ、オンとかオフとか。家族が一緒に付き添うっていうことではないですよね？

大藪　あ、でも、付き添うっていうことでした、そのときは。

鈴木　でしたか。

大藪　はい。

鈴木　え、ちょっと分かんないのが、でも、野瀬さん、違いますよね？

大藪　違いました。

鈴木　ど、どういうことなんですかね、それは。

大藪　ね。そこが、そうですね。

鈴木　主治医によって考え方が違う？

大藪　そう。そうだと思います、恐らく。

鈴木　ああ。なるほどね。比較的、野瀬さんの場合は、なんか、簡易、その時期はかなり寛容だった。なんか、全然。

大藪　うんうん。寛容でしたよね。

鈴木　ですよね。

大藪　全然、ボランティアさんが気管吸引とかもして。

鈴木　あ、ですよね。

大藪　うんうんうん。

鈴木　で、それについては別に、特に言われずに、1 年、2 年、過ごされたんですよね。

大藪　そうそうそうそう。そうでしたそうでした。

鈴木　で、もう一人の方は、でも、家族と一緒にいてくださいみたいなこと、主治医に言われた。

大藪　言われました。言われました。

鈴木　主治医さんによって。

大藪　やっぱりそうですよね。

鈴木　なるほどね。で、大藪さんの大学、天理大学ですよね？

大藪　はい。そうです。

鈴木　そのときから 1 人暮らしですか。

大藪　あ、そうなんですよ。大学 1 回生の入学のタイミングで、1 人暮らしを始めたっていう感じ。

鈴木　大藪さんの出身地ってどちらなんでしたっけ。

大藪　出身は京都の向日市。あ、今もそこに住んでるんですけど。

鈴木　じゃあ、向日市の支給決定を。

大藪　あ、でもですね。そのときは、あの、もう天理市のほうに住民票移して。

鈴木　あ、そうか。そうですよね。

大藪　それで、そっちで受けてました。

鈴木　何時間、決定を受けたんですか。

大藪　えっとですね。大学の頃は、ええっと、700 時間ぐらい下りてます、最後。ただ、ま、土日は結構、実家に帰るっていうスタイルをその頃はやってたので。なので、あのー、そうですね。ま、土日の分は省いて、え、平日の分は全部、支給決定できるっていう感じでしたね。

鈴木　で、えっと、キャンパスの中を、こう、移動することって重訪はできないじゃないですか。

大藪　できなかったです。

鈴木　それ、ボランティアサークルのボランティア使って、移動されてましたか。

大藪　これがですね。本当はそれをしたかったんですけど、結局、でも、大学が奈良になっちゃったので、京都で集めたボランティアさんが来られなくなっちゃって。それで、あの、また大学のほうで。ま、入学の前に何回か、あの、学生支援課とか、教務課とかだったかな、あの、相談に何回か行ったんですけど、そのときに、あの、学内でボランティアさんを募集したいっていうことを、ま、言って。で、もう、一から集め直すっていう形でしたね。

鈴木　ふーん。じゃ、一応、ま、それで集めて、一応、その、学内で移動っていうか。

大藪　そうですね。これも最初は、なんか、学校側のほうからは、あのー、ま、ご家族、誰か一緒に来れないかっていうことは向こうから言ってきはったんですけど。そのときも言われたんですかね、そういうことを。だけど、いや、ま、実際にそれは無理なんですっていうことで。で、まあまあ、そうそう。あのー、まあ、最終的には教授とかも、ま、協力はしてくれて。集める、まあ、何ていうんでしょう、授業のときに、あの、(＃＃＃＃@00:23:50)とかはさせてくれたりとかはしてたんですけど。

鈴木　やってくれた内容っていうのは、どういうことだったんですか。

大藪　あ、えっと、教授？

鈴木　あ、あの、そうですね。学内の。

大藪　えっと、ボランティアさん？

鈴木　ボランティアさん。

大藪　は、あのー、基本的、ま、ノートテイクと、あとは、その、休み時間のトイレ介助と、あと、食事介助と、あとは、まあ、移動。キャンパスの、教室間の移動とか。そうですね。ただ、まあ、ノートテイクは大学のほうからも、何ていうんですか、学内アルバイトみたいな形でお金出てたんですけど、その他のトイレとかに関しては、もう、完全ボランティアでっていう(＃＃＃＃@00:24:33)感じですね。

鈴木　なるほど。うんうんうん。で、ま、あの、無事にっていうか、その、大学生活、3年、あ、4年、何事もなく？

大藪　まあまあまあまあ、何とか。いろいろあったって言ったらあれですけど。

鈴木　ありましたか。

大藪　フフ。そうですね。

鈴木　で、あの、卒業されて、えっと、どうされたんですか。

大藪　卒業して、で、あのー、そうなんですよ。あ、卒業して、もう、すぐにダスキンの海外基金の研修で、アメリカのシカゴに留学に行ったんですね。あのー、3 回生のときだったかな。大学 3 回生のときに。

鈴木　3 回生？

大藪　に、あの、いや、あのー、3 回生のときに、あのー、そのダスキンの試験で受かって。で、4 回生、あの、ま、いろいろ準備して。で、卒業と同時にアメリカへ行ったっていう、そういう感じでしたね。

鈴木　えっと、何年ですかね？

大藪　えっと、2017 年の 4 月から 9 月までアメリカへ行ってたって感じです。

鈴木　卒業されたのは 2017 年の 3 月？

大藪　あ、そうです。

鈴木　ん？　シカゴのどちらでしたっけ？

大藪　えっと、シカゴのアクセス・リビングっていう CIL ですね。

鈴木　何をされたんですか、そちらでは。

大藪　そこでは、まあ、あのー、何ていうんでしょう。本当、自立生活運動っていうの、僕、全然、恥ずかしながら、知らなかったので。なので、まあ、いろいろ、そのセンターの人に話聞いたりとか。それから、あのー、まあ、何て、アメリカって、あの、ADAPT という、えー、なんでしょう、草の根の運動体みたいなのあるんですけど、それのアクションに一緒に参加したりとかですね。ま、他の、そういう障害関係の施設を見学させてもらったりとか、ま、そういうふうな感じで過ごしたんですかね。

鈴木　それまでは CIL のことは知っていたんですか。

大藪　は全然、関わりはなかって。で、それこそ、ダスキンでアメリカに行くってなったときに初めて知ったっていう感じでした。

鈴木　じゃ、ダスキンのほうが先っていう感じですかね？

大藪　そうなんですよ。

鈴木　どういう経緯でダスキンを知ったんですか。

大藪　それは、もともと大学の2回生ぐらいのときに、留学に行きたくて。で、あの、学校の、ま、交換留学、大学の交換留学の試験を受けたんですけど。で、交換留学の試験には通ったんですけど、ただ、まあ、介助面とかのことでやっぱり無理だってことになっちゃって、結局、諦めざるを得なかったんですね。で、ま、そのときに大学の、天理大学に八木三郎先生っていう先生がいて。その先生が、あの、ま、車いすの当事者の方なんですけど、ダスキンの選考委員もやってる先生で。その先生から、あの、教えてもらったっていう感じですね。こういうふうにしてアメリカ。あのー、門はせま、広くはないけど、頑張れば行けるかもよっていう感じで、教えてもらった感じです。

鈴木　それが大学、えっと、2年、3回生のとき？

大藪　それは2年生。

鈴木　あ、2年生。

大藪　はい。そうですね。

鈴木　で、えっと、ま、いろんなことを学んで、帰ってきたのが9月？

大藪　そうですね。はい。

鈴木　で、その後、どうされたんですか。

大藪　それから、ま、あのー、正直、最初は、もう留学が終わった後、特に何もすることがなかったんですよね。自分の中で、どう、さあ、これからどうしようかなと思ってたときだったんですけど。ま、それが、ま、縁があって、アメリカで、にいるときに、あのー、ワシントンD.C.でADAの25周年のイベントがあって。で、そのときに日本からもユースの若手たちが結構、アメリカに来てて。そのときに、あの、大阪にある、あるるっていう、あるるというセンターの安原さんっていう女性の当事者の方に、まあまあ、声掛けてもらって。で、

京都出身なんですっていうことを言うと、まあ、なんか、知り合いが JC にいてて、一回も会いに行ったことないから、ちょっと、日本帰ったら一緒に会いに行こうぐらいのふうに誘っていただいて。で、それで、あの、日本帰ってきて。確か、その同じ月だったかな。違う。9 月か 10 月ぐらいに初めて JC を訪れたんですけど。そこから、僕が JC に関わりだし、関わるようになっていったっていう感じでした。

鈴木　安原さんに声掛けてもらったっていうの、アメリカにいるときに声、直接、声掛けてもらった？

大藪　そうなんですよ。

鈴木　安原さんもアメリカにいらっしゃった？

大藪　いら、いらっしゃって。安原さんが。ま、何ていうんでしょう。僕もそのときは、何ていうんですかね、あの、全然、そういう日本の CIL の人とつながりが、ほぼなかったんですけど、ま、安原さんが。あ、なんかの話の流れで、僕がダスキンで今、来てるんだっていうことを言ったら、安原さんが私も昔、ダスキンいてた、そういうところから始まったわけです。

鈴木　アメリカで会ったんですか。

大藪　そうです。アメリカで初めて会いました。

鈴木　ワシントンで？

大藪　ワシントンで。

鈴木　ということは、大藪さんは、じゃあ、ワシントンにその会があるということはご存じだったんですか。

大藪　僕は、あ、その会があることは知ってたんですけど、だけど、あの、日本からみんな来るとは知らなかって。で、行ってみたら、なんか、やけに日本人がいっぱいいるなと思って。で、みんな、何しに来てるのかなと思ってたんですけど。なんか、僕も、あんまり、恥ずかしくて、自分から声を掛けずにいたんですけど、そしたら、日本の、そうそう、方が、あの、僕に声掛けてくれて。せっかくだから、一緒になんか、マーチ、マーチ一緒に出ようよみたいな感じ、みたいな感じで声掛けて。

鈴木　なるほど。で、JC に訪問したのは安原さんと一緒に訪問したんですか。

大藪　一緒に訪問しました。

鈴木　へえ。

大藪　そうなんですよ。岡山さんと安原さんが、なんかに知り合わはって。で、岡山さんが一回、会いに行きたいみたいなことを安原さんが思ってはったときに、ちょうど僕がひょこんと現れたから、じゃあ、一緒に行こうよという感じになって。

鈴木　で、最初、訪れたのが 9 月ですよね？

大藪　あれが、確か 9 月の初めですね。はい。

鈴木　で、そのときにどんな話を？

大藪　そのときは、それこそ、本体で、あのー、小泉さんとか、渡邉さんとか、岡山さんとかが、ま、迎えてくださったんですけど。あのー、ま、自分の話ですかね。アメリカで、ダスキンでこんなふうにして研修受けてきましたみたいなことで。で、ま、ずっと京都にいるんだけど、あのー、まあ、自分自身、全然、そういう CIL とのつながりが今までなかったから、ま、もしよかったら、自分もなんか一緒にできたらうれしいなみたいなことを話ししましたね。で、小泉さんたちが、もう、ぜひぜひおいでっていう感じで。うん。で、ま、その、それから、多分、その翌月に、あの、鈴木先生がお話ししてくださったスキマ勉強会っていう、あれで、僕と安原さんでアメリカのことを報告するっていう時間をつくってくださって。それから、そうですね、本格的に関わりだしたっていう。

鈴木　あのー、座談会で、なんか、えっと、岡山さんから、なんかやりたいことがある？って聞かれて、で、それで、野瀬君っていう人がいるっていう。それ、いつ、そういう話？

大藪　それはですね。それは。ちょっと、僕が JC。そのスキマ勉強会も終わって。で、多分、最初の頃、週に 1、2 回ぐらい、JC に行ってたんで。その頃は週に 1 回か 2 回ぐらい行ってたんですけど。ま、行っても、こう、なんか、特に何かをするということもなく、事務所で、なんか、ぽけーっと、こう、なんか、してたときとかに、ま、岡山さんが僕の、何ていうんでしょう、スーパーバイザーみたいな感じで、いろいろ指導、ま、教えてくれた感じ。なので、そうですね。多分、初めて JC 行ってから 1 カ月とかは、たってたぐらいかなと思

うんですけど。

鈴木　10 月ぐらい？

大藪　えー。そうですね。

鈴木　スキマ勉強会は 10 月で。

大藪　そう。10 月で。多分、その月、同じ。あ、10 月か 11 月か。

鈴木　同じ。10 月か 11 月？

大藪　多分、それぐらいだと思いますね。そこで、まあ、宇多野病院にそういう友達がいて、ちょっと、実は、ま、前々から気になってるっていうことを岡山さんに話したら、まあ、じゃあ、一緒に一回、行ってみましょうかっていう提案してくださったっていう感じでしたね。

鈴木　ちなみに、野瀬さんとは、もう、かなりあれですか。その、シカゴに行った後のコンタクトっていうか、連絡？

大藪　はいはい。取ってましたね。あのー、シカゴにいる間も LINE ではやってたりはしたし。そうですね。もう、それはもう、ただ単に友達だからっていう感じで、コンタクトは取ってました。

鈴木　で、大藪さんの中でやっぱり、その、友達の野瀬さんが宇多野にずっといて、なんか、やっぱり、ずっと思ってたっていうことですか。

大藪　そうですね。思ってましたね、やっぱりそれは、うん。僕が大学に進学した後から、やっぱ、ずっと思ってたところではあって。なんか、まあ、自分は本当に。ま、それこそ、鳴滝に通ってる当時も、僕は入院せずに、自宅から、あの、親が送り迎えしてくれてたんです。なので、まあ、そんな感じで。あと、まあ、大学にも進んで、自分は、まあ、こう、何ていうのかな、結構、外に、こう、どんどん出て行けたんですけど、野瀬君が出たいのに出れないっていうのを、うん、やっぱり、ずっと心のどこかにはそれがあったっていう感じでしたね。

鈴木　それって、思い始めた時期っていつ頃ですか。

大藪　いつぐらいやろう。うーん。

鈴木　小学校まで一緒で、中学校分かれて、高校も分かれてますよね？

大藪　分かれて。クラスは違いました。

鈴木　ですよね。

大藪　ですね。なんか、でも、本当、小学校の頃は、もう本当、毎日、一緒に遊んで、仲よかったんですけど、中学ぐらいから、ちょっと一時期、ちょっと関係が少し薄れたかなっていう時期も、ま、あったはあったというか。あんまりしゃべらないみたいなとこがあったんですけど、僕が多分、大学行き始めて、で、野瀬君があさがおで一緒にやりたいっていうことで。ま、その頃から言ってくれてたから、多分、それぐらいの頃から思い始めてたんじゃないのかなっていうのは思いますね。

鈴木　なるほど。で、あの、あさがおで、さっき申し上げた上田さんでしたっけ、訪問して。で、あのー、野瀬さんも、やっぱ、1人で暮らしたいなっていうことって話されてました？

大藪　あー。言ってたかな。多分、そういう話は、でも、うん、結構、ちょこちょこと僕たちの中では話しましたね。

鈴木　ていうことはそういう話をする中で、あ、野瀬さんが1人で暮らしたいんだなっていうふうに思うようになって、やっぱり、その、それも、やっぱり、あの、野瀬さんのことを思う上で大きかったですか。

大藪　大きかったですね。多分、なんか、最初の頃は、野瀬君も1人暮らしとは、もしかしたら言ってなかったかもしれないんですけど、ま、でも、やっぱり、病院を出たいっていう話は、うん、やっぱり、何かことがあるたびに聞いていた話ではあったので。そうですね。それを聞く度に、こう、なんか、ま、そう、すごく何とかしたいのに、でも、僕には何もできないっていう、その、なんか、そういう思いはすごく持ってましたね。

鈴木　シカゴにいるときって、なんか、そのために何かしようかなとかって、そういうこと考えたりしましたか。

大藪　そうですね。でも、やっぱり。あ、それこそ、アメリカ、ダスキンに、あの、応募するときの、まあ、志望動機みたいなこと書くんですけど、そこにも実は野瀬君の存在のこと

が、あの、はっきりとは書かないけど、まあ、僕の友達が、その、病院で長期入所生活を送っていて、なので、まあ、なんか、彼らの地域移行みたいなことに、ゆくゆくは力になりたいということは、うん、実は書いてました、そういえば。

鈴木　へえ。じゃあ、もう、行く前からそういう思いを持って、なんか、行ってる感じはあるってことですね？

大藪　まあ、そうですね。うん。なんか、やっぱり、僕にとっては彼の存在が随分、大きかったと思いますね。それで、なんか、アメリカに行ったら、もしかしたらもっと日本よりみんな地域に暮らしてるのかなっていう漠然とした、なんか、思いがあって、それを見てみたいなというのはありましたね。

鈴木　で、えっと、ま、CIL の話なんかも安原さん。あれ、でも、その前に。あ、そうですよね。あの、アクセス・リビングでも、かなりもう、CIL とは何かっていうこと。

大藪　は、そうそう。

鈴木　ですよね。

大藪　あ、実はその前にも、アメリカに行く前にも、あの、夢宙センターで一回、行ってて。そこでもちょっと、お話聞いたりはしてたんですけど。

鈴木　この、何ていうんですかね、仕組みを聞いたときってどう思いましたか。

大藪　あー。そうですね。どう思っただろう。うん。なんか、率直に、あのー、すごいなというか。あ、そうですね。みんな、当事者主体もやってるんだっていうのは。うんうん。なんか、それまで、あんまり、そういうのに触れてこなかったので。あの、うん、率直にこういうことやってる人たちいるんだっていうのは印象には残ってます。

鈴木　で、まだ、その時点では、自分がそういう形で関わるとは思ってもいなかった？

大藪　は思ってなかったです。ま、でも、なんか自分でもできることがあるのかなとは、多分、その頃、思いだしたとは思います。

鈴木　で、えっと、最初、JCIL に、その、2017 年 9 月、行って。ま、で、スキマに勉強会やって。で、週 1 回ぐらい通って。そのときの大藪さんの立場ってどんな感じの立場で関わ

ってたんですか。

大藪　その頃は、えーっと、ま、何ていうんでしょう。運動体の、えー、仲間というかな。

鈴木　仲間というか。

大藪　別にそんな、仕事とかではなく、本当に、まあ、運動体っていう感じで。

鈴木　今は。ごめんなさい。あの、スタッフになるのっていつですか。

大藪　なったのは、えっと、去年の3月なので。そうですね。まあ、ただ、まあ、だから、3年、丸3年ぐらいは、まあ、そういう運動体の仲間みたいな感じで活動してて。で、ま、スタッフとして採用されたのが、本当、まだ1年半ぐらい。

鈴木　あ、そうなんですか。

大藪　そうなんですよ。

鈴木　え、じゃあ、えっと、それまでは、じゃあ、えっと、運動体の会員みたいな感じですか。

大藪　何ていうんでしょう。そうですね。

鈴木　今、ちなみに、えっと、今っていうか、それ、もらうまでって大藪さんは、自立生活するときの経済的な基盤ってなんだったんですか。

大藪　は、あの、あ、えっと、それこそ、あのー、僕自身、えっと、この、自分がスタッフとして、まあ、お給料もらうようになるまでは、実はまだ実家にいたんですよ。実家にいて。

鈴木　あ、そうかそうか。そのときからね。

大藪　なので、障害年金、まあ、もらってたので。それであとは。ただ、生活保護とかは受けることはなくっていう感じだったなんですけど。で、ま、直接、僕がスタッフになるっていう瞬間に1人暮らしを始めました。

鈴木　なるほどなるほど。

大藪　ので、それからは年金と、その今もらってるお給料でやってる。

鈴木　なるほど。1 級ですよね？

大藪　1 級ですね。はい。

鈴木　身体的なのも 1 級ですよね？

大藪　あ、そうですね。

鈴木　区分は、ちなみに 6 ですよね？

大藪　区分 6 です。

鈴木　大学時代っていうのは、じゃあ、仕送りか何かでですか。

大藪　は、まあ、でも、実は、結構、年金だけでやってました、割と。年金と、ま、手当もありますけど。

鈴木　ああ、障害者手当。ええ。

大藪　障害者手当。ま、あくまでもそうじゃない。まあ、でも、あの、うん。あと、ちょっと足りない分はうちの親が(＃＃＃＃@00:42:23)。

鈴木　なるほど。で、えっと、割かし、早く、こう、宇多野に行きますよね？　あの、つまり、10 月の終わりから 11 月に提案して、行くの 12 月ですよね？

大藪　そうです。

鈴木　それ、どう思います？　なんか、すごい早かったような気がするんですけど。

大藪　早かったですか。今、思えば、すごい早かったなと思います。当時は、でも、なんか、あ、あ、行くんだみたいな。あ、行ってくれるなら行こうかなみたいな。フフ。

鈴木　なんか、やっぱり、そういう。何ていうんですか。なんか、僕から見るとすごい動き

が柔軟に、こう、フットワークが軽いように見えるんですけど。なんか、やっぱり、なんか提案すると、JCIL って、じゃあ、やってみたらみたいな感じで、すぐ、こう、動くような感じの印象ですか。

大藪　そうですね。それはあるかもしれません。特に、まあ、岡山さんとそのとき、ま、セットで動いてたっていうのがあって、僕。だから、岡山さんもかなりフットワークが軽いところがあるから。そうですね。だから早かったのかなっていう感じ。

鈴木　なるほどね。で、12 月に野瀬さんを訪問して。そのときって、ま、事前に、ま、行くよみたいな電話して、行ったんだと思うんですけど、どんな感じでした？　印象としては、大藪さんの気持ち的に。

大藪　気持ち。そうそう。なんか、一番最初、それこそ、野瀬君に、多分、JCIL っていうものが、ま、実は自分が最近、関わり始めて、で、こういうことをしてくれる団体なんだよねみたいなことを、野瀬君に一応、説明はして。で、ま、岡山さんっていう人と、あと、ま、健常者のスタッフの人と一緒に行くよみたいなことで言って。なんか、自分としては、うん、気持ち的には、何ていうんですかね。なんか、ちょっと、実は、自分の中で複雑なところもあったというか。何ていうのかな。それまではただ単に友達としての関わりしかなかったので、それが、こう、自分が見た、なんか、JCIL の支援者みたいな立場で、こう、行くということに関しては、なんか、若干の抵抗もあったといえば、ありました。そこで、少し、こう、野瀬君との距離が、なんか、生まれてしまうんじゃないかというか。ある意味、支援する側、される側みたいな、こう、立場になっちゃわないかなっていう、そこは、なんか、ちょっと複雑な気持ちもありつつも、ま、でも、やっぱり、野瀬君の力になりたいというのが大きかったから。そうですね。まあまあ、行ったという感じでは。

鈴木　今から振り返ると。今も、こう、野瀬さんと関わってらっしゃいますけど、あのー、なんか、恐れてたような、そういう距離とかいうことが、やっぱりありましたか。

大藪　ああ。や、ま、でも、実際のところ、なんか、思ったほどそこまで、何ていうのかな、友達関係が、こう、なんか、どうこうなるってことは、やっぱりなく。それは、ちょっと、なかったといえば、なかったかなとは思います。ま、僕個人的にはですけど。野瀬君はどう思ってたか分かんないけど。まあ、でも、あのー、普通に接してくれてるし。ただ、やっぱり、そういうちょっと真面目な話もやっぱり増えるは増えて。その、真面目な話というか、それまで友達同士だったらそんなに堅苦しい話、したことなかったけど、結構、堅い話もするようになったし。そうですね。ま、でも、関係性自体は、全然、そんな。恐れていたことは全然、大丈夫だったかなという感じ。

鈴木　メリットってあります？　友達関係であることで、支援をするっていうことのメリットっていうのかな。

大藪　メリット。そうですね。うーん。なんか、何ていうんでしょう。友達であるが故に、あの、これ、もしかしたら、メリットでもあり、デメリットでもあるかもしれないんですけど、何ていうか、やっぱり距離が近い分、いろんな話を、何ていうんだろうな、あの、実はこうなんだよねみたいな、あの、本音を、本音が聞けるというのはあったと思います、野瀬君の。結構、その、これはよくあったんですけど、なんか、病院の中で、まあ、訪問して、で、野瀬君に、ま、最近どう？みたいな感じで聞くんですけど、なんか、あの、何ていうんだろう。例えば、岡山さん。岡山さんとかにはあんまり、こう、本音は、実は病棟の先生に対してこういうふうに思ってるっていうことが、なかなか彼自身、結構、言葉にできなかった(＃＃＃＃@00:47:02)。ただ、それを、まあ、そのときは言わないけど、後でなんかでLINEでもう一回、電話かけたら、なんか、ぽろ、ぽろっと本音をしゃべってくれるとか、そういうことは、うんうん、あったと思いますね、振り返れば。

　まあ、でも、逆に、逆に、こう、何ていうんでしょう。友達でもあるが故に、なんか、うーん。ちょっと、自分の弱いところは見せたくないみたいなところも、多分、あっただろうなとは思う。弱いところっていう言い方は良くないかもしれないですけど。うん。なんか、やっぱり、多分、岡山さんには言えることでも、僕には言えないってことも逆にあったんだろうなとは思いますね。うん。

鈴木　そういう、なんか、友達関係の人が支援をすることについては、それはありかなと思いますか。

大藪　ああ。まあ、でも、そうですね。僕個人的な感覚としては、全然、ありかなと思います。うん。そうですね。現に、まあ、それで今、彼も(＃＃＃＃@00:48:08)、ずっと、これて。今でも友達。ま、友達でもあり、同じJCの、ね、活動の仲間でもありという感じの関わりができているので。うんうん。それは本当にうれしいなと思う。

鈴木　あのー、2017年の12月に訪問して、そのときってどのぐらいの時間、野瀬さんと話したりとか、時間過ごした？

大藪　最初は、多分、あのー、そのとき野瀬君と藤田さんの所にも行ったんですけど。多分、お二方、合わせて2時間半ぐらいいたと思うので。いや。もっとか。3時間ぐらいか。だから、多分、野瀬君と1時間半ぐらいは、多分、しゃべってたかと。

鈴木　なるほど。そのとき行ったのは大藪さん、岡山さん、小泉さん、段原さんと？

大藪　えっと、一番最初のときは、多分、そのメンバーでした。小泉さん。あ、それで、あとは岡山さんと他の介助者っていう感じ。一番最初はそうやったと思います、確か。3 回目ぐらいから、3 回目か何回目か忘れたけど、途中から高橋さんがそこに加わるようになったっていう感じ。

鈴木　うん。でも、段原さんは介助者っていう立場では行ってないってことですね？

大藪　そうですね。そのときは違いました。段原さんは、うん、車の運転もしてくれてて。あとは、あの、やっぱり、(＃＃＃＃@00:49:36)段原さん自身が、結構、過去に、あの、施設からの地域移行に関わってきはった方なので。それ、でも、小泉さんが、多分、段原さんも一緒に、あの、連れて行こうと思わはったんやと思います。

鈴木　お車で行かれたんですね？

大藪　あ、そのときは車で行きました。

鈴木　JCIL のお車？

大藪　あ、そうです。JCIL の車で。

鈴木　そっからだと何分ぐらいですかね？

大藪　JC からだと。何分かかったかな。ま、でも、1 時間、1 時間はかからないかな。30 分ぐらいかかるんですかね。

鈴木　あのー、藤田さんも訪問して。そのときって大藪さん、藤田さんとお会いするのは初めて？

大藪　えっと、初めて。あ、でも、実は、僕が、多分、小学生ぐらいのときに、あの、なんか、見かけてはいました。ただ、話したことはなかったっていう感じでしたね。

鈴木　じゃあ、ほぼ、皆さん、初めての状況ですかね？　岡山さん、小泉さん、段原さん。

大藪　そうですね。だと思います。JC で言えば、金さんって方がおられて。

鈴木　はいはい。金さん。

大藪　JC の金さん。その方は、多分、アテンダントの関係で藤田さんと、あの、面識があらはったんですけど。

鈴木　でも、金さん訪問されて？

大藪　訪問されてない。

鈴木　ないですもんね。あのー、そのとき、藤田さんにお会いしたときってコミュニケーションどうされたんですか。

大藪　ええっとですね。最初は。あ、でも、藤田さんが、あの、ま、今と同じように、ま、あの、口パクというか、しゃべってくださって、それを、多分、確か、段原さんかな、が一番近くで、こう、耳元で聞き取って、それを僕にちょっと復唱してくれるんでって感じだったはずです、確か。

鈴木　うんうん。えっと、藤田さんとはどんな話しされたんですか、そのときは。

大藪　何をしゃべったんでしたかね。一番最初のときは、あのー、多分、それ。ま、そうそう。それまで、あのー、アテンダントを使って、えっと、外出をされてたけど、もう、しばらくできておられなくて。で、その話を、確か、してました。まあまあ、最近どうなのかとか。あとは、まあ、確か、そのときにカニューレをもう一回、話を、多分、してくださったんですけど。主治医の先生が、藤田さんのカニューレが非常に抜けやすい構造になっているから、その、外出は駄目だっていうふうに言われて。で、カニューレ交換っていうか、自分に合ったものに変えてほしいって言ってるんだけど、全然、それが変わらないみたいな話を、確か、一番最初のときに聞いたと思います。

鈴木　うんうん。野瀬さんとはどんな話、されたんですか。

大藪　野瀬君とは、あのー、そうですね。野瀬君は、でも、あの、ま、1 人暮らしをしたいという、彼は明確にそれを最初から持っていたといえば持っていたので。なので、あの、あ、ま、多分、一番最初は初めましてだから、まあ、あの、野瀬君の、何ていうんでしょう、まあ、ちょっとした、紹介とか。あとは、まあ、彼の、絵描いたりするのがうまいから、そういう絵を一緒に見たりとかもしたし。うんうん。あとはあれですよね。まあ、あの、1 人暮

らししたいと思ってて。えっと、あの、何だっけ。病棟の指導室の人とかにその思いは伝えてるんだけど、まあ、でも、あの、なんか、全然、実際的には動、動かない。まあまあ、もう、1年、2年がたってるみたいな話を、うんうん、していたと思います。

鈴木　で、その後、えっと、2017年12月、訪問した後、次の年迎えて、2018年の1月とかにも行ってます？

大藪　あ、そうですね。(＃＃＃＃@00:53:41)ます。

鈴木　で、えっと、そのときも、やっぱり、野瀬さん、藤田さん？

大藪　そうでしたそうでした。

鈴木　で、行くメンバーも1回目と同じように？

大藪　同じようなメンバーだったはずですね。

鈴木　で、3回目は2018の2月？

大藪　2月。

鈴木　で、そのときは高橋さん？

大藪　いたかな。

鈴木　いる、いるような感じに？

大藪　えっとね、ごめんなさい。ちょっと、今、何回目かを具体的に覚えてないんですけど。そうですね。途中から高橋さん。

鈴木　途中からですよね。

大藪　(＊＊＊＊カエッタ@00:54:06)とこがあるんですけど(＃＃＃＃@00:54:07)。

鈴木　ああ。あのー、基本的にはあれですか。そっから月1ぐらいのペースで、えっと、野瀬さん、藤田さんっていう感じの訪問日程ですか。

大藪　うんうん。そうです。そのときにはそんな感じ。で、そうですね。ま、最初の頃は、本当、みんなで日を合わせて、で、みんなで訪問するっていう感じになって。まあ、ただ、やっぱ、途中からだんだんと、何ていうか、毎回、みんなの予定合わせるのも大変だっただろうし。で、あの、退院とかの日がちょっと具体的になってくると、月 1 回の訪問では、やっぱ足りないというか。なので、そうなると、もう、行ける人が。なんか、もう、随時、必要に応じて行くとか、そんな感じになっていく。

鈴木　えっと、どの辺あたりから変わっていきます？　2018 年の最初のほうまでは一緒にみんなで行ってて。

大藪　行ってましたね。

鈴木　シンポジウムの 12 月 24 日ぐらいまでですかね？

大藪　ぐらいまでは。そうですね。あ、でも、あのときにはもう、実は植田健夫さんが退院されていて。で、植田健夫さんが、それこそ、多分、えっと、何月だったかな。春ぐらいですかね。春ぐらいに連絡があって。で、それから、あの、えー、多分、みんなで一緒に行ったときに、あの、野瀬君、藤田さん、で、植田さんの所にも訪問するようになって。それぐらいから、多分、あの、みんなが一斉に話を聞いてるとちょっと時間が足りないから、じゃあ、僕は野瀬君の所に行くので、岡山さんは植田さんの所に行くみたいな、ちょっと分担制になっていったというか、その、植田さんの。

鈴木　ちなみに、藤田さん、どなたですか。

大藪　藤田さんは岡山さんとかが行ってはりました。でも、それも、なんか、毎回、ちょっと微妙に違うとこがあって。

鈴木　あ、そうですか。

大藪　で、そうですね。うん。でも、その、植田さんが加わ、加わったというか、あの、(＊＊＊＊ラインサークル@00:56:07)に来はったときぐらいまでは、結構、みんなでひと月に 1 回、2 回、合わせて行ってたと思いますけど。

鈴木　行って、野瀬さんに、その、行って。みんなで行くわけですよね？　野瀬さん行って、で、藤田さん、みんなで行く。

大藪　そんな感じでした、最初は。で、みんなで話を聞くような感じでしたね。

鈴木　あの、それ、聞きたいんですけど。割りかし、こう、当事者の人も複数関わって、そこに介助者もいてみたいな、結構、何人かで関わるじゃないですか。

大藪　関わってますね。

鈴木　それ、それについてどう思います？　どうしてそうされてるのか。

大藪　ああ。ま、でも、それこそ、その頃は、あの、僕もそうなんですけど、岡山さんも、多分、そういう地域移行に関わった経験が、多分、ほとんどなくて。僕に関しては、もう、全くの初めてなので、あのー、到底、一人では、何ていうか、ちょっと分からないというかですね。話は聞けるんだけど、具体的に、じゃあ、こういうふうに動いていけばいいっていうノウハウが全くなかったので。で、みんなで行って。あと、ま、段原さんとか高橋さんは、もう、かなり経験を持ってはったので、なので、そういった詳しい人と、まあ、あとは僕と岡山さんとかと一緒にスタッフみたいな感じで。そうですね。そうやって動くっていうのが。まあ、その頃は、多分、そうじゃないと、僕も、多分、できなかった。

鈴木　なるほどね。その後、じゃあ、割かし、じゃあ、もう、担当みたいな感じで。で、大藪さんは野瀬さんみたいな感じで。

大藪　そんな感じで。そうです。僕が野瀬君で、岡山さんが藤田さんで。で、植田さんは割と、なんか、そう、うん、なんか、明確にどっちとかではなくて、なんか、僕と岡山さんで緩く、緩く、どちらも関わるみたいな感じでやって。で、でも、まあ、植田さんの場合は高橋さんとかがかなり、ま、動いてもらえたっていう感じではありました。

鈴木　野瀬さんに対して大藪さんが、ま、担当みたいな感じになって、そのときに、えっと、他の当事者の人も、えっと、まあ、なんか関わるってことにもされますよね？

大藪　あ、そうですね。ありました。ありました。まあ、基本的には岡山さんっていう感じではありましたけど。

鈴木　ああ。なんか、お互いに、こう、一応、担当みたいになってるけど、でも、それでも、やっぱり他の当事者の人がサポートに入ってきたりとか。

大藪　はい。そうですね。ま、でも、あんまり、本体のメンバーがというよりは、割と、本当、もう、僕と岡山さんっていう感じではありましたね。その、当事者メンバーが関わるというのはそんな感じで。あとは、まあ、ちょっと本体で、なんか、こういう状況じゃないけど、どうしたらいいかなみたいな、ちょっと相談というか、世間話的な感じでの相談っていうようなことはすると。うん。

鈴木　これ、やっぱり、何ていうんですかね。こう、あのー、例えば、他の法人だと、なんか、担当者一人がもう、完全に 1 人で基本的に動くっていうことが多いんですけど、JC の場合は結構、こう、それでも、やっぱり、何人か複数で、こう、動いてるように見えるんですね。それは意図的にそうされてるのか。経験がないってお話しされましたけど、でも、今でも基本的にそうなような見えるんですけど、それはどうですか。

大藪　なるほどなるほど。そうですね。なんか、ま、宇多野は。それこそ、JC では、ちょっと、あの、チーム宇多野っていうグループをつくってて。で、そこには当事者は僕と岡山さん。最初はですね、僕と岡山さん。で、段原さん、高橋さん。あ、小泉さんか。小泉さんも入ってました。その 5 人で最初、そのチームをつくってて。で、それこそ、あの、その、宇多野に訪問するのとは別に、月 1 回ぐらい、必ずみんなで集まって、ちょっと、お互いに情報共有して、で、じゃあ、これからどういうふうに動いていこうかっていう作戦を練るような会議を毎回してたんですけど。そこで、こう、なんか。なので、なんか、そこってみんながその状況を共有するというか。で、うん。僕は主に野瀬君のことをやるんだけど、藤田さんの話も、そこで、やっぱり、一緒に聞くし、で、そこで(＊＊＊＊コウスウ@01:00:39)、なんか、一緒に考える感じで、なんか、そういうのはずっと、そうなってますね。

鈴木　うんうんうんうん。やっぱり、そういうことやることのメリットっていうか。

大藪　うん。なんか、ま、もう、でも、本当に、あの、初めての地域移行に関わったっていうのがあったので。それで、やっぱ、自分だけだと本当、何も分からないというか、制度的なことも全然、何ていうか、詳しくないし、その、具体的な、何ていうのかな、病院とのそういう交渉というか、掛け合いとかも分からないし。うん。で、まあ、実際、宇多野病院の支援自体がみんな、全員、初めて、まあ、ほとんど初めてに近いという感じだったので、中が、そうですね。なんか、みんなで知恵を出し合うというか、そういうふうな。うん。

鈴木　でも、今、もう経験を積まれてますけど、これからまた新たに移行したいって人が出てきたときにどう、どうされるんですか。やっぱり、チームでやるのか、担当決めて、1 人で動くのか。

大藪　あー。やっぱ、でも、なんか、1 人で動くっていうのは、結構、何ていうんでしょう、うん、プレッシャーではあるなとは思います。

鈴木　何て？　何て？

大藪　プレッシャーというか。

鈴木　ああ。プレッシャー。

大藪　うん。なんか、結構、そういう。あの、これ、多分、僕の個人的な感覚ではあるんですけど、なんか、地域移行するっていう、特に宇多野病院とかの場合、本当に、なんかちょっとしたことで、それが一気に失速するとか、なんか、うまくいかなくなることってあって。なんか、それが、多分、自分一人で関わってると、なんか、もう、完全に自分のせいだみたいな感じになっちゃうと思うんですけど、なんか、それが、ま、チーム宇多野みんなで共有しながらやってたので、なんか、うん、そういう意味では、何ていうのかな、1 人に対する負担というか、それはだいぶ楽だったんだろうなとは思いますし、そのほうが、なんか、無理なくやっていける気はするというか。うん。ちょ、うん、そうですね。

鈴木　あのー、いろいろ、こう、訪問されたりとか何度もしてると思うんですけど、それは、あのー、地域支援相談給付受けてないですよね？

大藪　受けてないですね。

鈴木　受けない理由って何ですか。

大藪　受けない理由は、なんか、あの、聞いた話ですけど、ま、単純に申請が面倒くさいのと、あと、申請したところで、そんなに大した額が入ってくるわけじゃないっていうか。なんか、それの話を最初は聞いた、そんなことを聞いたと思います。その、うん。

鈴木　で、えっと、まあ、野瀬さんに対して考えたときに、まあ、1 カ月 1 回で行って、途中から 1 週間に 1 回ぐらいなるのっていつぐらいになってるんですか。

大藪　あれはですね。いつだったかな。あのー、ま、でも、結構、野瀬君の退院がもう近づいてる、てた時期ではあるので。そうですね。退院の 3 カ月前とかだったかな。

鈴木　あの、クリスマスシンポあって、2019 年の 1 月ぐらいから、かなり、こう、退院の

手続きが進んでいくじゃないですか。そのぐらいですかね？　まあ、まだ退院まで。退院、7 月なので。

大藪　7 月。まあまあ、半年以上前ではあるけど、まあ、でも、そうですね。それぐらいから、多分、僕が毎週、行くわけじゃないんですけど。まあ、僕が行ったり、あと、ま、やっぱり、高橋さん、段原さんがかなり機動力が高いというか、ちゃちゃっと行かはるので、(＃＃＃＃@01:04:41)感じ。で、ま、話を聞いたら、それをそのグループのメッセンジャーとかで共有して考えるとかですかね。

鈴木　メッセンジャーっていうのはグループチャットとか？

大藪　あ、そうです。そんなやつですね。うん。

鈴木　あのー。あ、じゃあ、大藪さんご自身が 1 週間に 1 回、通うっていうのは、えっと、だいぶ後になってからですか。

大藪　僕はそうですね。本当、最後のほうですね。

鈴木　ふーん。なるほどね。

大藪　なかなか、毎週行くっていうのが、結構、ちょっと大変でもあって。

鈴木　なるほど。

大藪　そうそう。それもあって。

鈴木　最後のほうっていうのは、えっと、3 カ月とか前？

大藪　その頃にはもう、毎週、毎週、行ってたわけではないっていう感じでした。なので、僕自身は、うん、多くて月に 3 回とかぐらいの感じで。

鈴木　それは大体、3 カ月間ぐらいなんですか、そういう。

大藪　だったかな、多分。あ、ごめんなさい。3 カ月もないかもしれません。もっと、もっと直近かもしれません。

鈴木　2カ月間とか？

大藪　ぐらいかもしれません。

鈴木　で、それ以外、基本、1カ月1回ぐらいの感じで？

大藪　そうですねそうですね。そんな感じでした。

鈴木　その、野瀬さん訪問するときっていうのは、じゃあ、あのー、別に、藤田さん訪問しないわけですもんね？

大藪　ええっと。あ、まずは、そうですね、顔を見に行く。

鈴木　顔を見に行って、あと、ちょっと声掛けたり？

大藪　そうですね。

鈴木　で、その、途中から、あのー、田中さんもね。クリスマスシンポの後ですよね？

大藪　後です。はい。

鈴木　2019年1月から、訪問されてますよね？

大藪　そうそう。しました。はい。

鈴木　それも、やっぱり1カ月1回？

大藪　そうですね。田中さんもそうですね。1カ月に1回ぐらい行ってました。

鈴木　大藪さんが担当されたんですか。

大藪　それは田中さんも結構、僕と岡山さんで。なんか、これも、なんか、すごい、どっちが担当というよりは、割と、あのー、何ていうんでしょう、そのときの状況に応じて。あの、きょうは、じゃあ、岡山さんが藤田さんといっぱいしゃべらないといけないから、(＃＃＃＃@01:06:53)には僕が行きますよとか。で、逆に、僕が、なんか、野瀬君といっぱい話さなきゃいけないときには岡山さんが聞いて。なんか、なんだ、がっつり担当は決まってなか

ったっていうか。

鈴木　なるほど。というのは、つまり、藤田さんは岡山さん、野瀬さん、大藪さんってある意味、こう、がっちり、こう、行ってましたよね。

大藪　そこはそうですね。行ってました。

鈴木　だけど、やっぱり、人がちょっと足りてないですよね？　要するに、田中さん、じゃあ、誰、行けるのかって言われたときに、フフ、1 人が 2 人っていうのはきついので、岡山さんと一応、こう。

大藪　そうです。どっちもがみたいな感じで。僕が聞いた話は、あの、後で、一応、そのグループチャットのほうで、まあ、共有するみたいな感じでやって。そう、でも、ま、単純に人手が足りないといえば、そういう話だとは思います。

鈴木　なるほどね。あのー、訪問回数とか訪問時間とかって十分だったと思いますか。

大藪　うーん。

鈴木　多分、野瀬さんについては。

大藪　野瀬君について。そうですね。

鈴木　支援者として。フ。

大藪　そうですね。まあ、でも、なんか、野瀬君って、結局、僕たちが一番最初に通い始めたのが 2018 年、違う、2017 年の 12 月で、退院が 2019 年の 7 月だから、ま、ほぼほぼ 2 年近くかかってるんですけど。うーん。まあ、それだけ、こう、なんか、長期間のスパンでやったから、なんか、まあ、あの訪問回数でいけたんだろうなと思うんですけど。ま、これが仮に、半年で退院したりとか、なんか、そんなんやったら、とてもじゃないけど月 1 回では足りないし。あと、やっぱり、まあ、2 年、退院まで 2 年かかるというのも、本来でいけば、多分、そんなにかかっちゃいけないっていうか。なんか、うん、やっぱり、もっと早く退院できたほうがよかったのかなっていう。

鈴木　なるほど。逆に言うと、訪問回数とか時間、もうちょっとあれば、退院が早かったんじゃないかっていう？

大藪　うーん。もしかしたら、あるかな。まあ、でも、結局、主治医が、やっぱり、なかなか、うんと言ってくれない限り動けなかったっていうのもあって。そうです。いや、それは、なんか、難しいとこですよね。訪問回数が多いからって。多分、もしかしたら、主治医がうんとは絶対、言ってくれない限りは、ただただ(＃＃＃＃@01:09:28)。

鈴木　じゃ、主治医がもし、こう、受け入れるような、そういう人であれば、ま、訪問回数がそれなりにあれば、もうちょっと退院が早かったかもしれない？

大藪　と思います。それはそうかもしれない。うん。そうですね。

鈴木　あと、あの、話しする場所って病室ですよね？

大藪　はい。

鈴木　十分、話せました？病室。

大藪　いや。結構、前に(＃＃＃＃@01:09:56)あの、看護師さんが帰ってきたら、ちょっと話を変えるとか。変えるという。フフ。そんなことはしました。特に、やっぱり病院のそういう、ね、病院に対する不満というか、そういうのを、まあ、野瀬君とかもしゃべってくれたんですけど、やっぱり看護師さんが来た瞬間に、もう、本当にマンガみたいですけど、ころっと話を変えて、最近、暑いよねみたいな話をね、したりとかね。そんな、かなり周りに気は使ってましたね。

鈴木　でも、なんか、世間話とかも結構されてたんですよね？

大藪　あ、やってましたやってました。うん。本当は駄目なんですけど、あの、差し入れというか。食事制限かかってるので。

鈴木　はいはい。聞きました。それは、ばれなかったですか。

大藪　ばれてるかも。

鈴木　ばれてるかもしれない？

大藪　かもしれない。相当、においがしてたので。フフ。

鈴木　フフ。

大藪　けど、そこは、まあ、誰にも何も言われなかったんですけど。

鈴木　なるほど。分かってて、じゃあ、看護師さんは結構、まあ、認めてるような感じは？

大藪　認めてるのかな。恐らく。

鈴木　あのー、なんか、その、CIL とか自立生活とか、そういうことについて病院の人に、こう、知らせるようなお話とかってされました？

大藪　それは、あの、まあ、カンファレンスとかの場で、あれですね。ま、一番最初の頃とか。あ、ごめんなさい。一番最初はないな。野瀬君が、まあまあ、ちょ、退院に向けて。あ、違う。ごめんなさい。その前ですね。植田さんが一番最初か。植田さんの退院のカンファレンスとか、そういうときに、まあ、あの、CIL がこういうもの、ま、こういう活動していてとかで。実際にタブレットだったかな、持っていって、写真とか写して、ちょっと説明することはやったと思いますね。

鈴木　植田さんは 2019 年の、えっと、え、3 月でしたっけ？　え？　退院したいとか。

大藪　退院したのが。

鈴木　あ、ごめんなさい。あ、そっか。退院したのが。

大藪　2018 年。

鈴木　あ、そうですね。シンポの前ですもんね。2018 年の。

大藪　11 月。

鈴木　11 月ですよね。で、退院したいって言ったのが訪問した後でしたよね？確か。

大藪　あ、そうです。訪問した後。

鈴木　ですよね。

大藪　植田さんの退院カンファレンス行ったのが7カ月前ぐらいで。

鈴木　はい。ですよね。

大藪　何月かな、ていうと。そうですね。

鈴木　まあ、で、その後、支援会議っていうか、退院カンファレンスっていうのをやったっていうのが、じゃあ、4月とか5月とかその辺り？

大藪　多分、その辺りだと思います。で、集まって。ま、JCと、あと病棟の、ま、主治医と看護師長とか。あと、地域連携室とか、その辺だったと思います。

鈴木　じゃ、そのときが初めて、こう、自立生活とかCILとか、やってることとかを話す機会になった？

大藪　そうですね。確か。あ、ま、でも、それより前に、その、看護師長さんとかと、ちょっと、まあ、何ていうか、そんながっちり場を設けてではなくて、まあ、立ち話な感じで、ちょっと、うん、話したっていうのはありました。

鈴木　大藪さんが？

大藪　えっと、僕がというよりは、高橋さんとかあたりですかね。なんか、これもですね、岡山さんもよく言ってはるんですけど、なんか、当事者主体って言いつつも、やっぱり、そういう、何ていうんでしょう、話。特に相手がそういう病棟スタッフとか医療者とかだと、やっぱり健常者の人が言うほうが、なんか、向こうも納得してくれるケースっていうのが、結構、悲しいけど、あるにはあるので。で、なので、その、うん、病棟の中でもやっぱり、高橋さんとかの存在というのはだいぶ大きかったと思います。

鈴木　なんか、そういう、逆にそれを、うまく、こう、活用するじゃないけど、向こうのことを配慮してっていうか、考えて、ちょっと健常者にそれで役割、担ってもらうっていうか。

大藪　そうそうそう。ありました。なので、病棟のほうと、あと、ご家族。家族に電話とかするときも、やっぱり高橋さんがいかにも支援者という感じで話をすると、割と、あの、最初は家族も、なんか、いや、そんな訳の分からんところを言われてもみたいな感じだったとしても、ちょっと納得してくれるとかっていうのは、うん、ありましたね。

鈴木　当事者スタッフと健常者スタッフの役割って、ま、多分、そこにあると思います。他にもあります？なんか、そういう役割分担のところ。

大藪　そうですね。あ、まあ、あとは、その、結構、やっぱり、健常者スタッフのほうが明らかに、はるかにフットワークが軽いのは軽いので。なので、あのー、例えば、そういう、なんでしょう、書類を出さないといけないとき、まあ、行政の書類とか、その辺は、もう、やっぱり、結構、健常者のスタッフの方にやってもらうみたいなことは多かったですね。

鈴木　物件を見に行くとか？

大藪　あ、見に行くとか。そうです。

鈴木　そうですよね。

大藪　で、ま、われわれ、やっぱ当事者スタッフとしては、やっぱり、どちらかというと、本当に、あの、まあ、本人、当事者の話聞いて、ま、ピアサポートってところが大きかったとは思うし。ま、あと、逆にそういうカンファレンスの場とかで、結構、その辺は、われわれの実践というか。実際の自分の暮らしぶりとかを、ま、話したりするのは、やっぱり僕たちのほうが、何ていうか、あの、すごく身をもって話せるというか、そういうのあったり。そうですね。そういう分担はあった。

鈴木　野瀬さんとか藤田さんと、直接、こう、話をする、やりとりするのも基本、当事者っていうふうに考えてました？

大藪　あ、そうですね。そこは結構、そうでした。まあ、でも、まあ、あの、高橋さん、段原さんも話はもちろんしてくださったんですけど。ですね。ま、でも、やっぱ、そこの思いを聞いたりするのは、まあ、どちらかというと、当事者という感じですね。

鈴木　でも、一方で、例えば、野瀬さんが高橋さんに電話をされて、なんか、それで悩み聞いてもらったりとか、そういうこともありますよね？

大藪　あります。うんうんうん。あります。あります。

鈴木　じゃ、一応、何ていう。一応、まあ、当事者が聞くけど、健常者のスタッフがそういった相談に、当事者の相談に乗るってこともあったってことですね？

大藪　もあったと思いますね。うんうんうんうん。

鈴木　で、実際、植田。植田さんは、あれですか。高橋さん、結構、かかってますもんね。

大藪　かかってます。植田さんは、ほぼ、高橋さんと言っても過言ではないぐらい。

鈴木　ですよね。

大藪　ですね。

鈴木　その辺りはあれなんですか。やっぱり、なんか、人が足りないからなのか、何なのかっていう。

大藪　そこは、多分、でも、そうです。まあ、一つは単純に、なんか、あの、植田さんの場合、かなりスピーディーに話が進んでいって。われわれ、岡山さんとか僕とかが、なんか、あの、そのスピードに追いつけなかったといえば、そうかもしれない。なので、もう、高橋さんが。高橋さんってもともと、がちがち仕事をする人だから、それで、もう、がちがち、話を進めていってくれたっていうところはあります。まあ、もっと時間が、多分、あれば、僕とか岡山さんで。まあ、そのときは、結構、そうですね。なんか、高橋さんが、もう、実務的なところ動いてくれて。ま、僕と岡山さんは本当、植田さんの話を聞くとか、そんな感じ。あと、セルフプラン作るときも、ま、ちょっとお手伝いはしたりぐらいの話。いや。セルフプランも高橋さんが作ったか、そういえば。

鈴木　そうなんだ。へえ。

大藪　そうそう。そうなんですよ。植田さんときは本当にそういうの作って、本当に高橋さんって感じ。

鈴木　へえ。ま、そういうパターンもあるってことなんですね。

大藪　そう。うん。いいのか悪いのか、ちょっと分からない。

鈴木　はあはあはあはあ。あの一、野瀬さんとは結構、電話でやりとりされたんですか、大藪さんは。

大藪　結構、してましたね。

鈴木　結構っていうの、1カ月、どのくらいですかね。日に、まあ、月によると思うんですけど。

大藪　まあ、でも、なんか、それこそ、それは、なんか、逆に友達であるが故があるかもしれませんけど。その、相談だけではなくて、世間話を。

鈴木　世間話とかね。

大藪　ついでにちょっとそういう相談を聞くとかぐらいで。なので、結構、しゃべってたのは。どうでしょうね。まあ、1回、電話すると、まあ、1時間とか2時間とかはしゃべって。

鈴木　フフフ。毎週とか？

大藪　あ、いや。毎週。あ、でも。でも、多いときは毎週ぐらいしてましたね。だから、あんまり、ちょっと、なんか、参考にはならないかもしんないですけど。

鈴木　そういう、何ていうんですか、世間。あ、でも、あれか。あの、他の方に対してはどうですか、他の。あ、でも、藤田さんとか、特にあれですか。世間話とか。

大藪　藤田さんは、それこそ、あのー、ま、電話は、やっぱ、藤田さんの場合、難しいので、できなかって。で、あのー、田中さんは結構、Zoom とかでしゃべってたりはしてたんですよね。でも、それはでも、やっぱ、世間話はすることなく、ほとんど、もう、実務的な話ばっかりで。その、セルフプラン作るために、まあ、電話で相談しながら、ちょっと一緒に考えるとか。うん。あと、まあ、家具、家電、新しいの買うのに、まあ、どういうのがいいかなとかをよく、こう、一緒に考えるとか。

鈴木　田中さん？

大藪　田中さんの場合。そういうのはやってましたね。うん。

鈴木　あの、藤田さんって、やっぱり、発話、難しいですよね？

大藪　はい。

鈴木　で、電話は基本的に難しくて、代わりにあれですか。メッセンジャーのグループチャットって結構、使ってましたか。

大藪　使ってましたね。使ってたけど、でも、これもまた、やっぱり、藤田さんも、その、ま、パソコンのセッティングっていうのが、何ていうか、いつでもいつでもやってもらえるわけじゃなかったっていう感じで。だから、かなりタイムラグが大きかった。こちらから一個、ぽんと藤田さんに何か投げ掛けると、返ってくるまでに、まあ、うん、やっぱり 2、3日とか、遅いと 1 週間とか返ってこないときだってありました。

鈴木　それ、グループチャットですか。

大藪　グループチャットですね。藤田さんの、まあ、体調とかもあるのかもしれないし。あとは、その、やっぱり、単純に、多分、あれですよね。うん。パソコンの、恐らく、セッティングの問題、大きかったんじゃないかな。

鈴木　じゃあ、グループチャットって、なんか、通常、リアルタイムでやるようなイメージあるんですけど、そうじゃなくて。

大藪　ではなくて。そうじゃなくて。送ったら、しばらくして返ってくる。

鈴木　そこで返ってくる？

大藪　で、また、それに対して、こちらからもう一回、送るとか。うん。なので、藤田さんは、そうなんですよ。やっぱり、かなりスピードが、そういう意味では、ゆっくりではあった。

鈴木　Zoom はどうでした？

大藪　Zoom は。それこそ、Zoom を使ったのは本当に、もう、あの、ええっと、高橋さんと僕で一緒に、なんか、こう、指導室の方にお願いして。で、一回やったんですけど。結局、Zoom でしゃべったの、本当にもう、藤田さん、何回だったかな。1 回、2 回。2、3 回ぐらいしかなくて。ないです。そのときには、ま、指導員の方が付き添って。で、藤田さんが言うことを聞き取って、僕たちに復唱してくれてという感じでやってたんですけど。もう、そういうやり方あれば、その場でのリアルタイムのコミュニケーションは問題なくできるかなって。けど、ま、そこは指導員の方がおられるから、あんまりそんな、何ていうか、ちょっと踏み込んだ話は、なかなかしにくいというか。

鈴木　ああ。なるほど。

大藪　そうですね。なので、うん、ちょっと、藤田さんもだいぶ言葉を選んで話されるっていう感じではあったと思いますね。

鈴木　やっぱり、向こうの都合もありますよね？　時間的な。

大藪　あ、そうそう。あります。やっぱ、指導員の方の都合に合わせてましたね、そのときは。うん。

鈴木　何時から何時まででした？

大藪　それはですね。もう、でも、1 回の Zoom で 30 分とか 1 時間ぐらいの話なので。多分、お昼の、ま、1 時から 2 時の間とか、そんなんでしたね。

鈴木　それで、何ていうんですか。あのー、やりとりしたいことってある程度、話せたか、話せなかったってどう思います？

大藪　うーん。なんか、でも、ま、あんまできてなかったと思います、そういう意味では。うん。それこそ、まあ、なんでしょう。Zoom も、ま、Zoom 自体、指導員の方も初めてそのときに、こう、支援してくれたっていう感じだったので、セッティングにもだいぶ時間取られたし。やっぱり、だから、あんまり、こう、うん、具体的な話っていうのはできてなかったなと思いますね。

鈴木　ということは、その、Zoom ではちょっと難しい部分もあって、で、メッセンジャーでも時間もちょっとかかってしまって。どんな方法であれば、藤田さんってそういう、退院前の話し合いとか、情報共有って、一番いい方法ってどんな方法だったと思いますか。

大藪　そうですね。やっぱり、でも、訪問してたときには一番スムーズだったと思いますね。訪問すれば、その場で、まあ、看護師さんとかの顔色も伺うことなく、まあ、率直な話を聞けていたので。で、まあ、例えば、Messenger 送って、なかなか反応がなかったとしても、ま、訪問するときにその話聞いたりとかはしたので(＃＃＃＃@01:23:53)。

鈴木　あのー、コロナ禍でどうすればよかったと思って。ま、うん。

大藪　そうですね。なんか、うん。ま、例えば、まあ、分かんないですけど、なんか、誰かJC の、ま、健常者のスタッフ一人でもいいから、もし病棟の中に入れてもらえてたら、その人が藤田さんの横で、その、あの、Zoom つないで、で、岡山さんとか僕とか、みんながそれを聞くことはできただろうなとは、うん、思うし。ま、そうですね。それさえも、まあ、許されなかったというか。一回、高橋さんが実はちょっと入ろうとしたことがあったんです。

鈴木　フフ。お願いしたんですか。

大藪　お願いしたというか。そう。なんか、あの、何だったかな。あ、そうだ。岡山さんから、あの、ちょっと記憶が曖昧なんですけど、なんか、ちょっと、コロナの中で、こう、いつもの感じで。あ、いつも、普段は、コロナ禍になる前では、一回、面会カードだけ書いて、で、もう別に、看護師さん誰も呼ぶことなく、それで部屋まで行って、話を聞くっていうスタイルやったんですけど、それをやってみようみたいな感じで、フフ、やったら、見事につまみ出されたっていう。

鈴木　ハハハ。それ、面会規制された後ですよね？

大藪　された後です。あ、多分、高橋さんが、そうそう、一回、行って。それで、なんか、看護師さん。あ、そのとき、病棟の、多分、ナースステーションにいた看護師さんに、ちょっと入らせてくださいねみたいな感じで。で、その看護師さんが入れてくれたんですけど、でも、後で、多分、その、看護師長か誰かが、なんで入ってるだみたいな話になって。それで、あの、つまみ出されちゃった。多分、そんな話だった。

鈴木　うん。何月頃ですか。

大藪　それはですね。あの、面会規制が始まったときなんで。

鈴木　あれ、5 月でしたね、藤田さん。

大藪　あ、5 月でしたかね。多分、なんで、4 月。4 月かぐらいだと思います、多分。うん。4 月、5 月ぐらい。やっぱり駄目だったって言って。

鈴木　なるほどね。あの、Zoom でそういうコミュニケーションとろうとしたのってコロナ禍のときですか。

大藪　そうですね。

鈴木　その前はやってないですよね？

大藪　はやってなかったです。

鈴木　ですよね。うん。で、ただ、えっと、ごめんなさい。田中さんとは、なんかやってましたか。

大藪　田中さんとはやってました。

鈴木　それ、どういうツール使ってやってたんですか。

大藪　それは Skype。

鈴木　Skype だったんですか。

大藪　はい。

鈴木　うまくいきましたか。

大藪　田中さんは結構、うまくいってました。田中さんのときは、それこそ、あのー、リアライズっていう大阪のセンターが関わってくれてはったので。で、なんか、大阪と京都ってね、そうそう簡単に来れる感じでもなかったから。で、みんなで、じゃあ、Skype つないで、しゃべりましょうっていうのを、もうコロナになる前からやってたっていう感じだったんですよ。

鈴木　なるほどね。そっか。リアライズ、大阪だから、遠いからっていう理由でしたか。

大藪　そうなんです。そうなんですよ。

鈴木　なるほど。えっと、田中さんってあれですよね。えっと、シンポジウムが 2018 の 12 月 24 日にあって、その翌年の 2019 年の何月かに田中さんから、なんかね、連絡が。

大藪　そうそう。そうなんですよ。

鈴木　重訪を使いたいとか何とかでしたっけ？

大藪　あ、そうそうそう。そうです。

鈴木　あの、それってなんか、クリスマスシンポの影響あったってことですか。

大藪　あ、どうだったのかな。

鈴木　どう、どういう経緯で田中さんはそういうふうに言ってきたんですか。

大藪　あ、すみません。田中さんは、あの、確か、当時、療育指導室の、あのー、一番、え、何ていう、所長っていうのかな。ま、担当の、あの、イマサキさん。その方が、あの、田中さんが、そうやって重訪を使って外出したいという希望があるみたいなことを、あの、確か、高橋さんだったかな、に連絡くださったんですよ。それで、あのー、じゃあ、一回、話聞きに行きますみたいなことで、行ったんですけど。田中さんは、多分、別に、シンポ聞かれたとかではないんですよね。

鈴木　ないんですね。あ、そうですか。

大藪　そうなんです。

鈴木　どういう経緯で。なんか、でも、希望を言ったわけですよね？　その指導室の人に。

大藪　そうなんです。言ってもらったと思います。

鈴木　どうして、でも、重訪の、ヘルパーっていうことを、いつ知って、そういう話を。

大藪　あ、ごめんなさい。ちょっと、そこに関しては、なんか。

鈴木　接点ないですよね？　藤田さんところは植田さんが、なんか、同室で。それで、なんかね、あ、僕もみたいな話になったっていう。

大藪　そうそうそう。そういう(＃＃＃＃@01:28:51)あったっていう。

鈴木　そうですよね。

大藪　田中さんは病室も完全に別だし。えー、田中さんは。あれ。なんやったんやろな、あ

のとき。でも、あのー。あ、そうそうそう。それこそというか。あのときってまだコロナにはなってなかった。

鈴木　なってない。2019 年ですもんね。

大藪　そうなんです。それまでは結構、お父さんとかお母さんと一緒に、あの、外出をしてはったっていう話は聞いたんです。それが最近、ちょっと、あんまりできないっていうことだったと思います。多分、ご家族の関係で、ちょっとできてなくて。で、あのー、多分、イマサキさんが言ったのかな。そういうふうに重訪を使って出れるよみたいなことを言ったんじゃないかなと思うんですよね。

鈴木　なんか、重訪って 2018 年ですよね？　国の制度として。

大藪　えー、そうだったと思います。

鈴木　で、植田さんが最初に使いますよね？

大藪　使います。はい。

鈴木　だから、そういう、なんか、中で、やっぱり、あ、使えるんだってことを、やっぱり、その人も知るようになって。

大藪　恐らく、そうだと思いますね。で、実際に、じゃあ、自分もそれを使って外出してみたいっていう。田中さんは、だから、最初は本当、1 人暮らしをしたいっていうわけではなかった。外出がしたいっていう。

鈴木　そうですか。

大藪　実は藤田さんもそうなんですけどね。藤田さんも、一番最初は、外出したいっていう感じ。

鈴木　なるほど。でも、途中から、なんか、自分もっていう？

大藪　うん。そうですね。うん。そうそう。それで田中さんに最初、一番最初、話をしたのが僕と高橋さんと、で、田中さんと、あと、イワサキさんっていう療育指導室の方、確か、4 人で話をしたんですよね、一番最初。そのときに田中さんが、ま、外出したいっていうよ

うなことを言っておられて。で、僕と高橋さんが、ま、実は退院することもできますよっていうような話をして、そこからだんだんと田中さんも、あ、自分もできるんだったらやりたいなと思われるようになったっていう。

鈴木　で、それで、外出も結構、やるようになって。で、なんか、だんじり祭とかなんかでご両親と話してっていうの 10 月ですよね？確か、あれって。　2019 年ですよね？　でも、なんか、リアライズの、なんか、その、確保できなかったのかな、介助者の。

大藪　あ、そうなんです。そっちの、南大阪っていう大阪のほうでやるなら、ちょっと、今すぐとは難しい。

鈴木　ですよね。

大藪　（＃＃＃＃@01:31:34）。

鈴木　で、2020 年になって、コロナが起きてしまって。で、その後のやりとりっていうのは Zoom でやりとりしたんですか。

大藪　えー、そうですね。Zoom でやりました。

鈴木　Skype じゃなくて？

大藪　確か、それから後は Zoom を使って。ごめんなさい。Skype だったかな。うーん。あ、いや。Zoom。Zoom 使ってました。

鈴木　Zoom 使ってました。そのとき、Zoom のセッティングっていうのは、やっぱり、田中さんも支援が必要だったんですか。

大藪　あのですね。田中さんは、結構、でも、最初の頃は、それこそ、Skype を最初、やり始めた頃っていうの、あれ、コロナの前ですね。じゃあ、一緒に、（＃＃＃＃@01:32:17）とかと一緒に Skype をやろうとなったときは高橋さんとかが病棟に入って。ほんで、あの、高橋さんがセッティングして、一緒にやってくれてはったんですけど。ただ、途中から、あの、田中さんも、なんか、自分のスマホで、あの、（＃＃＃＃@01:32:36）から。まあ、ちょっと、看護師さんに最初、ちょっとやってもらったら、あとはできるっていう感じになって。そこからは、もう、誰も病院に行かなくても、Zoom でしゃべれるようになった。

鈴木　ということは、もう、一回セッティングすれば田中さんは、もう、自分で、こう、操作して、話せるんですね？

大藪　あ、そうそう。そうです。

鈴木　でも、最初の、なんか、セッティングは必要？

大藪　は必要でした。

鈴木　じゃあ、割かし、まあ、何ていう、復唱も要らないし、簡単にできるっていうことでやりやすかったっていう？

大藪　やりやすかったですね。あと、まあ、多分、最初、多分、一番最初は、その、あの、イヤホンかな。ちょっと、音があんまりよくなくて、あの、聞こえにくかったんですけど。それも、多分、みんなで相談して、なんか、こんなのいいんじゃないかなっていうので、それを実際に買ってもらって。で、それから本当に、あの、クリアに話ができるようになったっていう。

鈴木　あの、支援会議の他に話し合いも、その、Zoom を使ってやった？

大藪　使ってたと思います。うん。Skype だったか Zoom だったか、ちょっと、ごめんなさい。記憶が曖昧なんですけど。でも、あの、少なくとも支援会議以外でもオンラインでやってました。

鈴木　うん。それはこまごまとした話をされたんですか、そのオンライン上で。

大藪　あ、そうですね。

鈴木　退院に向けて？

大藪　退院に向けて。あのー、それこそ、最初の頃は、あのー、えっと、まあ、大阪のほうで、ま、自立生活したいって言っておられたので、それで、リアライズの方も一緒に、まあ、あの、話をしていたんですけど、まあ、途中から、やっぱ京都でやるっていうことになって。それから、でも、まあ、せっかくのつながり、リアライズさんとつながったから、リアライズの当事者のかたがたとも、やっぱりつながり続けてて。で、その、退院する前に、あのー、何ですか、まあ、家具、家電買うのに、じゃあ、一緒に相談するとか、あの、セルフプラン

作るのに、それ、つないで、一緒にしゃべって。

鈴木　リアライズの人も？

大藪　ええっと、そのとき、リアライズの人と僕とか野瀬君とかで、なんか、そういうふうな、ちょっとグループつくって、話したりとかしてですね。

鈴木　ごめんなさい。野瀬さんも加わってるんですか、それに。

大藪　野瀬君も加わってました、そのときには。うん。野瀬君も退院してきてたので。

鈴木　なるほど。

大藪　うん。そうなんですよ。

鈴木　で、えっと、じゃあ、1カ月何回ぐらい、そういう話し合いってされたんですか。

大藪　結構、田中さんはしてましたね。それこそ、毎週。

鈴木　毎週ですか。

大藪　ぐらいやってましたね。多分、退院の1、2カ月前ぐらいは毎週やってました。

鈴木　1回、何分、どのぐらいですか、時間的に。

大藪　1回につき、ま、1時間、1時間ぐらいはしゃべってましたね。うんうん。長いとき、長かったら2時間ぐらいしゃべって。

鈴木　うんうん。でも、割かし、こう、スムーズに田中さんの場合はコミュニケーションがとれて、うまくいったかなっていう？

大藪　そうですね。そういう意味では、コミュニケーションはとりやすかったですね。

鈴木　で、田中さんの場合、内覧にも行ってますよね？　外出して。

大藪　行ってました。

鈴木　行ってましたよね。外出が基本的にでき、できる人ですね。

大藪　そうですね。で、コロナだったけど、病棟も、は、その、内覧に関しては特別に許可を出す感じだったですね。

鈴木　なるほど。それ、植田さんと違いますね。

大藪　そう。植田さんとは違いますよね。うんうん。（＃＃＃＃＠01:36:11）。

鈴木　なるほど。うん。あと、あの、えっと、クリスマスシンポってやるじゃないですか。

大藪　はい。やりました。

鈴木　あれ、どなたの提案だったんですか。

大藪　あれは。ええっとですね。クリスマスシンポ。あれはどうだったかな。えっと、まあ、最初は、多分、小泉さんあたりが。ま、毎年、その、JCIL って、国際障害者年連続シンポジウムっていうのやってて。で、ま、今年のテーマどうしようかみたいな話のときに、ま、今、宇多野病院にかなり活発に支援してるから、地域移行をテーマにしようということで。で、あの、そのとき、メインストリーム協会も、あの、一緒に、何ていうかな、刀根山病院とかの支援されてたから、じゃ、JC とこに、あ、JC とメインで、ちょっと、その、地域移行について、一緒に共催という感じで考えようよってことになって、会をやることになった。

鈴木　あの、院長呼ぶっていうのはどなたの提案ですか。

大藪　あれは誰だったかな。あ、多分、小泉さんだと思います。小泉さんが実は院長の、にかかってる、あ、自分が外来でかかってる先生だって。で、なんか、一回、じゃあ、言うてみるって言ってっていうことで。

鈴木　意図ってどうだった？　なんか意図はあったんですか。シンポジウムをやることで、何かを動かそうとか。

大藪　あれはですね。まあ、当時、やっぱり、あの、病棟からの対応っていうのがすごく大変だというか、その、壁が大きいなっていうのを、ま、みんなが感じてたときだったと思うんですよね。で、ま、なので、こう、やっぱり、何ていうのかな。みんなに、やっぱ、この

地域移行っていうのを、この問題を知ってもらうというか、出たいのに出れない状況っていうのはやっぱりおかしいというか。で、あと、その頃、もう一個、医王病院の。医王病院っていう。

鈴木　医王病院？

大藪　はい。金沢。金沢にある。あの、医療の医に、王様の王で、医王病院、という所から、あのー、あれなんですよね。そうそう。あの、斉藤さんっていう方の退院支援を。それ、JCも関わった支援、メインで関わった支援。で、そこも本当に全然、うまくいかなかったっていう。ま、いろいろ、やっぱ、そのとき、重なってたっていう。宇多野だけじゃなくて、他の病院からの退院支援でも、あの、かなり行き詰まりがあったっていう。だから、そうですね。なので、やっぱ、筋ジス病棟っていうものがそのとき、かなりクローズアップされてたときではあるし。うん。ということがあって。

鈴木　で、それを、こう、外に、なんか、開いていくような。

大藪　そうですね。うん。そうです。やっぱり、開かれていくには、何ていうか、まあ、この問題を共有しないといけないというか、そういう問題意識だったと思います。で、ま、やっぱ、実際に、あのー、地域の(＃＃＃＃@01:39:49)だけじゃなくて、病棟、病院関係者の人にも、やっぱり話してもらいたいっていうことで、その、梶先生、宇多野病院の院長と、あと、もう一人、あの、中島先生っていって、新潟病院の院長かな、にも来てもらって。それは、あの、川口有美子さんっていう方が、あの、中島先生とかなりお付き合いがあるということで。で、その経由で呼んでもらったっていう感じなんですけど。そうそう。なので、その頃の(＃＃＃＃@01:40:22)ですね。

　あと、もう一個、医王病院のことをいうと、その前に、あの、古込さんっていう方が(＃＃＃＃@01:40:30)対応されてたんですけど、その支援に、あの、川口有美子さんとかも関わっておられたので、そういう話を、実際に、あの、シンポジウムでやってもらって。

鈴木　宇多野の関係者は院長さんだけですか。

大藪　えー、そうですね。来てもらったのは院長さんだけですね。

鈴木　病棟の師長とかは？

大藪　は来てなかった。

鈴木　来てない。見てもいない？

大藪　見てるかな。

鈴木　Zoom とかで。

大藪　見てたかもしれません。あのとき、そう、でも、そのときは、あの、Skype つないで。

鈴木　あ、Skype ね。

大藪　で、病棟の、あの、野瀬君とか藤田さんとか、あと、斉藤さん、医王病院の斉藤さんに、あの、実際のシンポジウムとかで発言してもらったんですけど。うん。で、そうですね。で、ま、その URL っていうの、結構、やっぱ、みんなに。あ、YouTube Live みたいな感じで配信もしたので。ま、できれば、病院の人にも、ただ見てほしいっていう(＃＃＃＃@01:41:26)。

鈴木　植田さんは登壇してますよね？　それは現場に行ってますよね？

大藪　現場にいました。植田さん、現場。あと、メインストリーム協会で、今、あの、活動されている高橋さんっていう方、(＃＃＃＃@01:41:40)かな、その方もいます。

鈴木　それは、やっぱり、なん・・・。

大藪　(＃＃＃＃@01:41:48)ごめんなさい。

鈴木　あ、ごめんなさい。

大藪　高橋さん(＃＃＃＃@01:41:51)。あ、いいですよ。あ、しゃべってもらって。

鈴木　あ、大丈夫ですか。あのー、問題を、こう、共有しながら、何ていうんですかね。その、やっぱり、こう、病院の院長さんを呼んだってことは、なんか、やっぱり、えっと、それをきっかけに、こう、変わってもらいたいなっていう？

大藪　あの、(＃＃＃＃@01:42:32)そうなんですよ。あの、そうそう。それ、それが、やっぱ意図としてはあって。実際、あの、院長さんが、まあ、講演してもらった後に、あの、ええっと、質疑応答タイムみたいなのがあったんですけど、その場で、ま、事前に、こう、ち

ょっと質問とかも募集してて。で、僕もその場で野瀬君のことをちょっと挙げ。ま、名前は出さないんですけど、友達が、まあ、あの、絶飲食とか外出禁止っていうふうになっている。で、なんか、でも、本人はそれをなくしてほしいと思っているというようなことを、ま、院長さんにその場で言ったんですよ。それで、なんか、あの、何て言ったのかな。まあ、でも、そういう、もう、何とかしてほしいみたいなことを言ったら、院長先生がその場で、あの一、まあ、実際、そういうふうに本人が望まない形になってるところも否定はできないし、何か、もし主治医とかの判断に対して異論があるのであれば、ま、院長、私自らが話を聞きますというような言葉を、その場で発してくれたんですよ。ま、実際、その後、ま、それは口先だけだったのかと思う、口先だけだったのかと思うんだけど。ま、でも、その発言があってから、結構、宇多野病院、ちょっと動きが変わった部分は実際、あった。うん。

鈴木　うんうん。それはやっぱり、何ていうんですか。ま、マスコミもそのとき、あの、報道してますよね？

大藪　してますね。

鈴木　やっぱ、そういうふうにして、外に、こう、いろんなこと知ってもらったっていうことが病院が、こう、動いていくことの大きなきっかけになってるってことですかね？

大藪　だったのかなとは思いますね。

鈴木　なんか、こう、解釈っていうか、理解がそのとき大きく変わったっていうわけでもないですよね、病院のサイドが。

大藪　そうですね。何か変わったわけではないと思います。ただ、それまで、藤田さんなんかが、当然、あの、車いすに乗ることができなかったんだけど、ま、それを機に、ちょっと、主治医と話をしたら、まあ、車いす移乗、週に、まあ、1回とかだったけど、できるようになったとか、ちょっとずつ動きだした。

鈴木　外のことをすごく、やっぱ気にかけてるってことなんですかね？　病院。

大藪　そんな気はします。なんか、特に、あの、やっぱ、虐待のあの報道があって、病院としては慎重にならざるを得ないところもあるのかなと思うし。まあ、病院からすれば、多分、痛いところを突かれてるのかもしれないですけど、まあ、でも、一定効果はあったんだろうなとは。

鈴木　でも、結果的に、状況変わらないじゃないですか。その、食事制限にしても。ま、藤田さん、一応ね、練習とかって外にっていうか、病棟は行きましたけど。病棟の外っていうか。でも、外には行けてないじゃないですか。

大藪　行けてなかったですね。

鈴木　でも、それについて、なんか、こう、JCIL として強く、こう、出てないですよね？

大藪　そうですね。

鈴木　それはかなり気にかけてましたか、そのことについては。

大藪　そうですね。やっぱり気にして。あの、まあ、あと、やっぱり、あれですね。本人、ご本人がやっぱり、その、強くいくというところをかなり、何ていうのかな、あの、拒まれたといえば拒まれたという感じで。まあ、野瀬君のときだと、その、絶飲食を解除をしてほしいっていうことで、シンポジウムが終わった後に、一回、院長先生と主治医と看護師だったかな。で、あと、JC の岡山さんと小泉さんと、もう一人、段原さんかな、のメンバーで、ちょっと話す場面も一回、設けたんですよね。で、その場で、その、まあ、野瀬君のその思いっていうのを伝えたんだけど、結局、主治医は、駄目。やっぱり、その、医療が、命最優先、安全最優先。で、まあ、院長先生も、なんか、もう、その場では全然、なんか、主治医の側に立ってしまったというか。

　で、野瀬君もすごい悔しいんだけど、やっぱり、でも、病院で、その、今すぐ出れるわけじゃなくて、これからもここで暮らさなきゃいけないから、その、主治医と完全に関係がこじれというのは、やっぱり彼自身が一番、恐れていたところではあるんですよね。だから、僕たち JCIL としても、それを、こう、うん。やっぱ、こちらが強く出ると、絶対、向こうは、多分、反発してくるから。で、関係が、やっぱりどうしても、こう、虐待的になってしまうというか。それは、やっぱ、さけてましたね。

鈴木　うん。やっぱり、その後、藤田さんも田中さんも控えてるっていうか、そういうこともあってとか。やっぱ、関係はなるべく、こう、壊さないようにっていうこと気に掛けてるってことですね。

大藪　気に掛けてましたね。あと、藤田さんもかなり、まあ、自分で考えて動かれるタイプだったので、こう、僕たちが、なんか、ちょっと、こう、少し、主治医に対して交渉しようっていうの提案しても、ちょっと待ってほしいっていう感じでした。僕たちも、さすがに、本人が言っておられるので、それを無視して動くのは、ね、ちょっと、やっぱり、っていう

のがあったので、そうですね。あんま強くは出なかった。

鈴木　で、あの、その後、あの、シンポジウムの後っていうか、筋ジスプロジェクトって 2019 年の 2 月ですよね？

大藪　そうですね。

鈴木　これ、クリスマスシンポと関係してますか。

大藪　関係してます。

鈴木　どう、どういう経緯だったんですか。

大藪　これはですね。シンポジウムが終わって、で、まあ、一回、ちょっと、何ていうんでしょう。まあ、その、メインストリーム協会の井上武史さんが、あの、ま、まあ、あの、ごめんなさい。その前か。立岩真也先生も、まあ、今回のシンポジウムは歴史的なものになったねみたいなことを言っておられた。大げさかもしれないけど。それで、まあ、井上さんも、あのー、いや、これで、シンポやって、はい、終わりっていうのは、なんか、もったいないというか、せっかくだから、このままプロジェクトを立ち上げて、もう、全国の筋ジス病棟、最初は解放って言ってましたけど、みんなを解放しようよみたいなことを井上さんが言われた。で、JC としては、全然、そこまで考えてなくて、もう、終わって、さあ、やれやれみたいな。また宇多野の支援しようかなぐらいにしか思ってなかったんですけど。あのー、まあ、で、2 月の 3 日に、その、井上さんとか、JC とか。あ、JC、メインストリーム協会、あと、川口有美子さんとか、誰がいたかな。結構、まあ、何人かそういう人たちが集まって、ミーティングをして、その場で、じゃあ、立ち上げましょうっていうのが。

鈴木　で、月 1 ぐらいですかね？　交流会だとか、そういうのやり始めますよね？

大藪　あ、そうですね。でも、交流会やり始めるのは実はだいぶ後。

鈴木　後でしたっけ。

大藪　コロナになってからなんですよ。

鈴木　あ、そう。

大藪　まあ、そういう意味では。ま、でも、2カ月に1回ぐらいか。2、3カ月に1回ぐらいはみんなで集まって。

鈴木　じゃ、オンライン上で何かやるっていうより、みんなで集まって、最初は？

大藪　最初は集まってました。大体、JC の事務所で集まるとか、あの、メインストリーム協会でちょっと合宿みたいなこともやったりもしたし。うんうん。やりましたね。

鈴木　で、コロナになって、じゃあ、オンラインでっていう、そういう提案が出て、やり始めたってことですかね？

大藪　あ、そうですね。そうですね。あ、そうそうそうそう。うん。で、まあ、その、ミーティングとかもオンラインでやるし。あと、ま、コロナをきっかけに、あの、逆に、これはオンラインで、今までつながれなかった病棟の人とつながれるチャンスかもっていう話になって。そっから交流会が始まっていったっていう感じ。

鈴木　なるほど。途中から、芦刈さん、参加するようになりますよね？

大藪　なりますね。

鈴木　様子、どんな感じでした？芦刈さん。

大藪　芦刈さんは。あれは何のタイミングで来はったんだろう。あのー、もともと、確か、芦刈さんは自立をしたいっていうふうに。

鈴木　言ってないですよね、最初。

大藪　言ってなかったですよね。あれ、何がきっかけだったんだろう。バリバラで。バリバラで、あの、秋田の加藤さんっていうのがバリバラで特集されたんですよね。あれがいつだったかな。えっと、記憶が曖昧ですね。でも、芦刈さんはいたので。あ、ごめんなさい。ちょっと、芦刈さんのこと、はっきり覚えてないです。なんでだったんだろう。

鈴木　でも、当初は、なんか、そういう希望なくて。でも、なんか、皆さんの話聞いて、なんか、8月に退院したいっていうふうに思うようになったっておっしゃってて。

大藪　そうでしたそうでした。あれは交流会がきっかけだった。いや。ちょっと違うかもし

れません。

鈴木　あの一、なんか、ま、そういう形でZoomで、こう、やってらっしゃると思うんですけど、大分だと、ま、芦刈さんですけど、Zoom で自立生活プログラムっていうのやってらっしゃるんですよ。料理とか、おそうじとか、お洗濯とか。その案っていうのはJCILの中で出ました？

大藪　これはですね。JCはILPっていうの、あんまり、そこまでやってないんです、実は。野瀬君、植田さん、藤田さん、田中さん、全員、そんなにILPはやってはない。

鈴木　やってないですよね。

大藪　そうです。ないです。

鈴木　じゃ、JCのスタンスはそういうことっていうことなんですか。

大藪　うん。なんか、昔は結構、ILPをやってたらしいんですけど。僕は、でも、どういう経緯でこうなったのかはあんまり詳しくは聞いたことがなくて。ただ、JC では、なんか、誰かが退院したとか、1人暮らし始めるってなっても、そんなにILPをしてないですね。

鈴木　ですよね。

大藪　どちらかというと、もう、本当に、まあ、ピアサポーター、当事者スタッフが話を聞いて、で、ま、一緒に、じゃあ、こうしようかとか考えるみたいな。だから、おそうじの仕方とか、お金の管理の仕方とかを、なんか、うん、伝えることはほぼしてないですね。うん。

鈴木　それ、大藪さんご自身はどう思います？

大藪　なんか、これは、ね。何ていうか。結構、うん、難しいところだなという気はしてるんですけど。何ていうか。ま、実際、野瀬君とかにしても、やっぱり、退院してきて、いろいろ、多分、彼も介助との関係性とかで、まあ、うん、悩むことも、やっぱりあったし。あの一、もしかしたら、ILPをもっと念入りにやっていれば、何か違ったのかもしれないとも思ったりはするんですけど、ま、でも、なんか。うん。ただ、いわゆる、こう、自立生活、イコール、自分で全て自己決定、自己責任みたいなスタンスっていうのは、JC は、ちょっと、そこには少し疑問を持っているというか。そうじゃない、それでうまくいかない現場っていうのがいっぱいあるっていう。

で、多分、その、今の、その、ピアサポーターの相談を受けながら、健常者スタッフも結構、何ていうかな、まあ、意思決定に結構、介入していくっていうか、多分、そういうスタイルになってきているかなと思います。まあ、ね。多分、どっちがいい悪いっていうのは、多分、言い切れないなとは思うんですけど。ま、でも、なんか、ILP で、こう、たくさん、ね、時間かけて、覚えるっていうのもちろんいいとは思うけど、まあ、出てからでも、やりながら学んでいくのも全然、それはそれでいいというか、僕がそうだったからっていうのはあるかもしれません。

鈴木　なるほどね。

大藪　そうですね。

鈴木　介助者の研修はどう思います？

大藪　介助者の研修。

鈴木　うん。あのー、何ていうんですか、そこの部分の、ま、ILT とか、その、それは必要だと思う？

大藪　ま、そこはそうですね。やっぱ、特に医療的ケアが皆さん必要な方だったから、そこは、やっぱ、やってましたよね、病棟に入って。うんうん。やってたし。

鈴木　できれば、それ、やりたかったってことですもんね？

大藪　やりたかったですね。

鈴木　つまり、外泊をして、対面で介助者研修をやる。それが一番、望ましい？

大藪　そうですね。それが一番、望ましいと思います。うん。そこはやっぱり、そうじゃないと、何ていうか、やっぱり、命に関わることがあると思うので。

鈴木　その、Bed to Bed っていう考え方、どう思いますか。フフ。

大藪　あれはですね。全然、あの、はい。僕たちそれをやったといえば、やったから。あのー、何ていうのかな。まあ、本当はそうじゃないほうがいいに決まってると思うんですけど。だけど、まあ、なんか、ね、もう、どうしても病院から外泊、外出できない状況の中では、

まあ、一つの選択肢としては、まあ、ありじゃないかなというか。大変だけど。

鈴木　最終手段？

大藪　そうしてでも、そうしてでも、やっぱり、出たほうがいいと思うんで。

鈴木　それで、やっぱり、何ていうんですか。退院支援のタイミングって大事にされてます？　先延ばしにするんじゃなくて、今だっていう、コロナ禍だけどみたいな。

大藪　あ、そうですね。それはあると思いますね。うん。なんか、先延ばしにすれば。あ、ごめんなさい。そろそろ終わり。時間がぼちぼち。

鈴木　あ、そうですね。もう、そろそろです。これ、最後で。

大藪　そうですね、あの、ま、先延ばしにすれば、ま、当然、そのほうが、多分、ゆっくり準備もできるんだろうけど、結局、なんかね、多分、ずるずる、ずるずる、なんか、伸びて。それよりは、ま、僕の考えかもしれないですけど、まあ、一日でも早く病院とかから退院して、それで、まあ、地域で移行しながら、いろいろ試行錯誤しながらでも。その、まあ、命の危険とか、それは良くないけど、まあ、命に危険が及ばない程度であれば、なんか、やっぱり、今っていうときに退院しちゃって、うん、あとは地域で。まあ、定着支援ではないけど。ていうか、後で支援はしながら一緒に考えていくっていうやり方。まあ、その、やっぱ、時期っていうのは結構、大事じゃないかなと思います。うーん。すみません。

鈴木　ありがとうございました。

大藪　こちらこそ。

鈴木　いや、本当、すみません、長々と。

大藪　いえいえ。でも、まだ、あれですか・・・。

（了）